
怪盗物語

norisann

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗物語

【Nコード】

N3991E

【作者名】

n o r i s a n n

【あらすじ】

「セイントテールだー！！」警官の声が辺りを駆け巡る。警笛の音も響いている。「太陽の石、たしかにいただきました。」透き通った声。月光が照らしシルエットが鮮やかに浮かび上がっている。巷を騒がせている怪盗セイントテールである。「逮捕だ！！」ドスの聞いた声だ。声の主は、柏木警部。セイントテール専門の刑事である。「待てー！！セイントテール」隣で、声をかけたのは、高瀬良平。高校生1年生、16歳。警察官ではないが、ひょんなことで柏木警部と出会い、セイントテール逮捕のために、警備に同行して

いる。

第1話

「セイントテールだ〜!!」

警官の声が辺りを駆け巡る。警笛の音も響いている。

「太陽の石、たしかにいただきました。」

透き通った声。月光が照らしシルエットが鮮やかに浮かび上がっている。

巷を騒がさせている怪盗セイントテールである。

「逮捕だ!!」

ドスの聞いた声だ。声の主は、柏木警部。

セイントテール専門の刑事である。

「待て!!セイントテール」

隣で、声をかけたのは、高瀬良平。

高校生1年生、16歳。

警察官ではないが、ひょんなことで柏木警部と出会い、

セイントテール逮捕のために、警備に同行している。

その二人をあざ笑うかのように、

セイントテールは軽やかに飛び上がり、視界から消えた。

いつもこの調子。何もできずに逃げられてしまう。

「くそ」。絶対俺の手で捕まえてやるからな」

- - - - -

翌日。

「良平、おはよ。」

昨晚のことを考えながら歩いていた良平に、後ろから声がかかる。振り返ると、そこには女子高生の姿。

一之瀬あおい。16歳。

良平と同じ高校に通うクラスメイトであり、中学からの幼馴染でもある。

「おはよ・・・」

良平は、振り向いてそっけなく返した。見るからに眠そうである。

「なにその顔。」

「うるさいな・・・」

「また昨日も、現場に行ってたんだ。」

「悪いかよ。」

「それで、また逃げられたんだ」

「・・・そうだけど。」

「もう、あきらめたら？」

「いや、あきらめないね。いつかこの手で捕まえるんだ!!」

急に元気を取り戻した良平の姿を見て、あおいは思わず笑った。

（目の前にいるだけどな・・・笑）

一之瀬あおいのもうひとつの姿。それが、セイントテールなのである。

そんなことに、良平が気づくはずもなく・・・。

- - - - -

二人が住む町は、清風市。

都会というわけでもないが、田舎というわけでもない。

どこにでもある町だ。怪盗が現れることを除いては。

怪盗セイントテール。最近町を騒がしている泥棒である。

その目的はわかっていない。

市民の間では、困っている人を助ける正義の義賊となっている。

- - - - -

AM 8:00

清風警察署。町の中心に位置している。

その一角に、セイントテール特別捜査本部が設けられている。専属として所属しているのは現在3人。

特捜本部を取り仕切っている柏木警部。

力だけが自慢の巨漢、増田刑事。

自意識過剰で、ナルシスト、橘刑事。

署内から選りすぐられた精鋭・・・というわけではない。

ただ、癖がありすぎて扱いづらいだけである。

「あゝくそ。」

柏木警部の機嫌は、朝から悪い。

「どうしたんですか、そんなにいらいらして」

橘刑事が、手鏡で髪型をセツトしながらつぶやいた。

「そうですよ。そんなにいらいらしてたら、お腹すいちゃいますよ。」

「

増田刑事は、片手におにぎりを持ちながらのんきに言った。

「どうしたもこうしたもないだろ！！お前らがそんなことだからいつもセイントテールに逃げられるんだろぅが！！」

柏木警部は、怒りの矛先を二人にぶつける。

それを、二人は特に何を言うでもなく、受け流した。

「まったく・・・」

セイントテールに逃げられた次の日の朝は、いつもこのようなやりとりがされていた。

「失礼します。」

婦警がそう言っつて、部屋に入ってきた。

「セイントテールから予告状が届きました。」

一通のカードを取り出した。

「また証拠にもなく・・・」

『明日20時、桜井ジュエリーよりヒスイの銀水晶をいただきます。怪盗セイントテール』

「桜井ジュエリー・・・」

柏木警部は、橘刑事を見た。一応担当があり、コンピュータで桜井ジュエリーの場所を特定する。

「一丁目の中丸商店街のはずれにある宝石店ですね。」

「またなんでそんなとくに・・・でヒスイの銀水晶については？」

「特に情報はないですね。」

「とりあえず、今から現場に行くぞ」

「はい！！」

二人は返事した。

柏木警部は、さっきまでの期限の悪さはどこかに消え去っていた。

（どれだけきれいな宝石かな・・・）

橘刑事は、単純に宝石に興味を抱いている。

（お腹すいたな・・・）

増田刑事にいたっては、まったく関係ないことを考えていた。

- - - - -

夕方。

桜井ジュエリーにいたのは、柏木警部から連絡を受けた良平だった。毎回下見して、警備プランをたてる。

中丸商店街は道路は挟む形で、一本道で構成されている。桜井ジュエリーは、中丸商店街の一番端に位置している。道と反対側は、すぐ川が流れている。

「ヒスイの銀水晶はどれですか？」

良平は、オーナである桜井にたずねる。

「これだよ」

桜井はぶっきらぼうに答えた。

指差した先には、他の宝石とは一線を引くように設置されたヒスイの銀水晶があった。

「何か盗まれることに心当たりは？」

「そんなものあるか！それより大丈夫なんだろうな。」

警察は任せてくださいとかいつていやがったが、いつも逃げられてばかりだろ。」

桜井はかなり心配性のようだ。すでにいてもたってもいられないというかんじだ。

「任せてください。今度こそ必ず捕まえて見せますから」

「その言葉とりあえず信じて明日の警備はまかせるからな」

「ありがとうございます。」

そういうと、桜井は奥に入っていつてしまった。

- - - - -

翌日 PM 7:00。

桜井ジュエリーの周りは、警察の警備で固められていた。

1階のヒスイの銀水晶の周りに、柏木警部と良平そして桜井。道側の入り口に橘刑事。

川側の入り口に増田刑事。

（ほんとに大丈夫なのか・・・）

桜井は思った以上に警備の人数が少ないことに驚いていた。

（学生らしき子供は、人数が多いと逆に混乱してしまうとか言っていたが）

「もう一度この目でしっかりと見ておきたいのだが」

「まあかまいませんが」

柏木警部が答えた。

桜井は、ヒスイの銀水晶が置かれた台座に近づいた。

「私は、2階にいます。警備の足手まといになるといけませんからね」

そう言うのと、そのまま返事も聞かずにあがっていつてしまった。

「あれだけ、心配していたのに・・・」
良平は少し違和感を感じた。

- - - - -

予告時間。

「各地、状況はどうだ。」

柏木警部がイヤホンマイクで確認する。

「異常なし」

「異常なし」

「よし、引き続き警戒を怠るなよ」

シーンと静まり帰っている。

「どこからでもかかって来い。セイントテール。」

川側の警備をしている増田刑事。

「お腹すいたな。早く終わってラーメン食べたいな」

増田刑事は、頭の中で想像してみる。

次第に、いい香りがしてきた。

「そうこんな香りで・・・！？」

急に意識が朦朧としてきた。

「こんばんわ、食いしん坊な刑事さん。」

増田刑事は、薄れていく意識を何とか保ち、上を見上げた。

「セイントテール・・・」

全身黒一色で統一されたボディースーツに身を包み、引き締まったボディラインが見事に浮かび上がっている。

肩からひじ辺りにかけて露出している白肌がより美しく見える。

「おやすみなさい」

セイントテールはそつと増田刑事の上を通り過ぎた。

「そろそろ時間だな」

良平は辺りの気配を探る。

「怪盗セイントテールだ!!」

突然大声が響いた。

「何!!どこだ」

柏木警部が声の出所を探る。

「増田さんの声です。」

「おいどうした。増田。状況は?」

「こんばんわ、柏木警部。」

「セイントテール!?!」

突然の声に驚きの声を上げる。

「どこにいる。姿を現せ!!」

イヤホン越しに呼びつけるが、ザーという音しか返ってこなかった。

「柏木警部はそこにいてください。俺が行ってきます。」

「気をつけるよ。」

良平が増田刑事がいたほうに走り出す。

良平が増田刑事の様子を見に行ってから、すぐにイヤホンから良平の声がした。

「柏木警部。セイントテールの姿を確認しました。」

柏木警部は、道側に出て右から追いかけてください。

先の十字路で挟み撃ちにしましょう。」

「わかった。」

柏木警部は、道側の入り口に向かって走った。

「どうしました？」

急に飛び出してきた柏木警部に、橘刑事は驚いた。

「セイントテールが現れた。お前は念のためそこで待機だ」

「わかりました。」

柏木警部は、先の曲がり角に向けて走った。

（よりまだ、セイントテールは出てきていない）

すると、角から人影が飛び出してきた。

ここぞとばかりに柏木警部は飛びついた。

柏木警部は、力任せに地面に押し付けた。

「捕まえたぞ、セイントテール！！」

「違います。柏木警部！！！」

「えっ」

よく見ると、そこには良平の姿が。

「すまん。それでセイントテールは？」

「何言ってるんですか？柏木警部がこっちに来いって。」

「俺はそんなこと言っていない。俺だってお前に言われたからこうやって・・・」

どうもお互いの言っていることが合わない。

「柏木警部、戻りましょう。」

（やられた。これはセイントテールの仕組んだ罠だったんだ。）

良平は、店の方向に戻った。

時を少し遡って・・・柏木警部が店を出てすぐ。

「思った以上に、うまくいった。」

もぬけの殻になった一階に、セイントテールが姿を現した。

「まっ、いいか。それよりヒスイの銀水晶と」

2階にいる桜井は、一瞬騒がしくなった後、続いている沈黙に、困惑していた。

（どうなっているんだ・・セイントテールが現れたといっていたが。）

今まで包まっていた布団から顔を出す。

（予告された時間はもう過ぎている。あいつらは捕まえたのか？）

「桜井さん、柏木です。安心して下さい、セイントテールは私たちが捕まえました」

「本当か、それはよかった」

桜井は部屋のドアを開ける。

シュツ！！

突然何かを吹きかけられた。

「何を・・・」

桜井は自分の意思とはまったく反する形で、その場に崩れ落ちた。薄れゆく意識の中で、確認したのは目の前にいるのは、柏木警部ではなくセイントテールではあること。

「これは、いただきます。」

「お前・・・」

「本来あるべきところはここじゃない。奪い取ったあなたが一番わかってるはずよ」

「くそ・・・」

そのまま桜井は意識を失った。

「セイントテールでてこい！！」

一階で良平の声がした。

「そっか、まだこれが一階にあると思ってるんだ。」

セイントテールは、手にあるヒスイの銀水晶を見て微笑んだ。

「おかしいな、まだこれはここにあるのに・・・」

柏木警部は首をかしげた。

「それに俺たちがここを離れている間に盗まなかったのも変です。」
良平も腑に落ちない。

そこに頭上から、一枚の紙きれが良平の前に落ちた。

『ヒスイの銀水晶は、予告どおりたしかにいただきました。ちなみに、そこにあるのは偽物です 怪盗セイントテール』

「何〜!!」

良平は、台の上のヒスイの銀水晶を確認する。

よく見ると、光沢がなく、他の宝石と比べても見劣りするのがわかる。

なぜこんなことに気づかなかったのか。

「自分が警備してるものぐらい、ちゃんと確認はしないとね」

良平をあからさまに挑発していることがわかった。

声の方向を向くと、2階にセイントテールの姿。手には本物のヒスイの銀水晶。

「何をしてる!! 早く捕まえろ。」

柏木警部が、橘刑事と数人の警官とともに、2階に向かって走り出す。

それを見て、セイントテールは後ろ向きになり視線から姿を消した。
良平は、2階には向かわずに、川側の入り口に走り出した。

入り口を出ると、あらかじめ用意しておいた2階のベランダに昇る踏み台を手を取った。

その踏み台を使い、勢いをつけてジャンプする。

ぎりぎり、とつての部分を掴み体を起き上がらせようとする。

2階から外に出るには、一箇所しか窓がないため、そこに先回りし、挟み撃ちにして捕まえる予定だ。

しかし、なかなか体が上がらない。

「うつ、・・・あれ？おかしいな、こうなることも想定して一度試しておいたのに」

そうこうしている内に、目の前の窓からセイントテールが現れた。そして、良平の方を見て、

「あらかじめ準備してみたいんだけど、少し低いものと取り替えておいたから」

「なっ」

「それじゃあね！」

セイントテールはそのまま隣の塀に飛び乗り、走り去っていく。

「ちよつと待て」

良平は何とかもがくが、それでもなおあがらない。

遅れて柏木警部達がベランダに現れた。

「セイントテールは？」

「あそこです。」

指差した先に見えるのは、何とか姿を確認するのがやっとなほど小さく写るセイントテールの姿。

「あゝまた逃げられた。・・・お前はなにやってるんだ！！そんなところで」

「見てわからないんですが、登れずに困ってるんですよ。」

「お前がちゃんとしてれば、ここで捕まえられたんじゃないのか。」

「それはそうですけど、柏木警部もここに来るの遅かったじゃないですか？」

「それは、あの後2階に登ろうとしたら、先頭の警官が倒されて・・・あーもういい。」

二人が言い争っている、何かピキツと音が。

「何か聞こえなかったか？」

突然ベランダの底が抜けた。

「わー！！」

そこにいた全員が下にあるごみ置き場に落下した。

「くそー、次こそは覚悟しろよ、セイントテール！！」

良平の叫び声がむなしく響き渡った。

第一話完

第2話

「いいかげん、返してください」

女性が男に詰め寄る。

「何のことを言ってるか、わからないな」

男は、とぼけた感じで軽く受け流している。

「ふざけないでください。あなたが作った模造写真のデータです。」

「おいおい、変な言いがかりはやめてくれよ。さあもう帰ってくれ。」

「

男は、休憩室らしき部屋から女を強引に連れ出す。

「まったく、女って言うのは・・・」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「それで、その後ごみ置き場に落ちたんだ。」

「そうだよ。」

良平とあおいが並んで歩いている。

（伝えるの忘れてた、老朽化してたこと・・・）

「何か言った？」

「えっ、なんでもないよ。こっちの話。」

「それより、ほんと毎回毎回懲りないね。」

「逃げられてばかりなのにつてこと？」

「そっ、そこまですることなのかなーて思って。」

「まっ、あおいにはわからないよ。」

良平は、あおいを気にも留めずに、そそくさと歩いていく。

あおいは、その態度が気に入らない。

「あーそうですか！一生追い続ければいいのよ」

あおいは早足で良平の前を歩いた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「ここか、ターゲットに指定された場所は？」

柏木警部は車から降りた。

「そうですね、ここです。」

橘刑事が、地図で確認しつつ答える。

『今週土曜日PM19:00、葵ビルに大竹氏所有の写真データを
いただきに参ります。 怪盗セイントテール』

「なんでまたこんなものを盗むんですかね」

増田刑事が疑問を投げかけた。

「わからんな、まあとにかく本人に会ってみるしかないな。」

2階の応接室。

「そんなもの知りません。」

「はっ？」

「盗まれるようなデータはないと言ってるんです。」

「しかしですね、現にこのように予告状が届いております・・・」

柏木警部が机の上に予告上を置く。

「何かの間違いじゃないですか？」

「いえ、今まで間違えて予告状が出されたことはありません。です
から・・・」

「警備するのはけっこうですよ。予告状まで出ていて何もしないわ
けにもいかないでしょうからね」

間髪いれずに大竹が柏木警部の言葉をさえぎる。さらに続けて、
「土曜日19:00もたぶんここで仕事していますから、警備する
にも特に問題ないと思いますよ。」

大竹は、笑みを浮かべそのまま、柏木警部の了解も得ず仕事に戻っ
ていった。

「なんだあの態度は!!」

柏木警部は、あの見下したような態度が気に入らないらしい。

「確かに怒る気持ちもわかりますけどね。それよりどうしますか、

ターゲットがどれかもわからないと警備のしようがないですね」
橘刑事がなだめながら言った。

「心辺りがないとか言ってましたけど、本当なんですかね?」

増田刑事が手にしたパンを食べながら言った。

「とにかく、ここにセントテールが盗みにくることだけは確実な
んだ。

「ここをどう守るか考えることにしよう」

- - -
- - -
- - -

昼休み

「心当たりがない!?!」

良平がすつとぼけた声を上げた。

「まあそういうことなんだ。とりあえず警備を通常通り敷こうと考
えてるが、

やはりターゲットがどこにあるかわからないと作戦の立てようがな
くてな。」

「まあ、そりゃそうでしょうけど。なんか怪しくありませんかその大
竹って男?」

「怪しいことは怪しいんだか、現時点でこれといって情報もないか

ら、どうすることもできん。」

「わかりました。確か予告の日は今週末でしたよね。」

その後、良平は警備のことについて、柏木警部と話した。

「また、セイントテールの話してたの？」

「今週末盗むって予告があつてさ。でもなんか、心当たりがないとか言ってるらしくてさ。」

「そうなんだ・・・」

あおいは、サンドウィッチをほお張りながら答えた。

「で、どうするの？」

「どうするって言われてもな・・・」

「頼りないな」

「まあ、どこにあるにせよ、俺達はただセイントテールを捕まえればいいんだから」

「はいはい、それはいつも聞いているから」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

清風警察署 セイントテール特別捜査本部

警備について会議が開かれていた。

柏木警部、橘刑事、増田刑事、そして良平も特別に参加している。

「とりあえず、これが葵ビルの見取り図だ。」

机の上に広げる。

「B1～5階からなる5階建てのビルで、各階東側にベランダがあり非常階段でつながっている。」

各フロアは大体4～5部屋ぐらいで構成されている。ちなみに今回標的になっている大竹氏がいるのは3階だ。

入り口は一箇所だが、ここは19時以降閉まるらしい。

代わりに、西側にある扉が出入り口になる。この通路は狭く、4 mの壁で囲まれている。

一回にある警備室を拠点に使用させてもらおうと考えている。」

柏木警部は、一通りの説明を終える。

それを待つて、おのおのの意見を述べる。

「今回配備できるのは、多くて20人ぐらいですよ。とてもすべてをカバーするのは無理っぽいですね？」

橘刑事が発言した。

「確かに無理だ。さらに、セントテールが現れるまで、フロア内の警備はNGだそうだ。」

「外と、通路のみってことですか？」

良平が尋ねた。

「そうなるな。各階ベランダに2人×5・・・」

配備人数を考えながらつぶやく。

「すいません、いいですか・・・」

良平が口を開いた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

土曜日 予告日当日

「冗談じゃないぞ、何でセントテールなんかこれが狙われないといけないんだ。」

大竹の手元には、写真データが入ったUSBメモリを見る。

周りには誰もいない。仕事をしているのは自分だけだ。

いや仕事ではない。もうひとつの趣味のために出社してきたといっ

たほうがよい。

「とにかくこれさえ守り抜けばいいんだ。」

1Fの警備室。

「本当に外の警備は、あれだけでいいのか？」

隣にいた柏木警部が声をかける。

良平の提案で、外の警備は必要最低限の人数しかけていない。

「結局、守らないといけないのはターゲットだけですから。」

それに外から進入することを防ぐより、進入してから逃げることを阻止することのほうが

このビルにおいては、やりやすいと思ったので。」

「まあ、確かにそうだが、問題はターゲットがどこにあるかだろ。」

「そのことですが、やっぱり大竹さんのちかくにあるじゃないですか？」

「どうしてだ？」

「直接あったことはまだないですけど、そんな大事なものの近くにおいておかないと気がすまないタイプみたいな気がしてるんで」

「確かにあの性格だと、その読みで辺りかもしれん。」

あとは、あの作戦がうまくはまればいうことなしだな。」

「そうですね。可能な限り協力していただいたんで。」

「後は増田のやつが、前みたいにくまひなれば問題ないな」

「そうですね。・・・そろそろ時間ですね。」

時計に目をやる。

（警備は、あんまりいないみたいね。）

葵ビルから少し離れたビルから、セイントテールが様子を伺っていた。

（また、何か企んでるでしょうけど・・・）

1F裏口。

一人の警察官が警備に立っている。

「すいません、通してもらいますか？」

ビルの清掃員らしき女性がカーとを押して近づいてきた。

「柏木警部。清掃員の方が見えましたが？」

「清掃員？ちよつと待て・・・」

そう言つて、一日のスケジュール表に目を通す。

ちようど清掃の時間となっていた。

「IDカード確認してから通してくれ。」

「すいません、IDカードを確認させてください。」

「ご苦勞様です。」

清掃員はIDカードを手渡した。

警察官も問題ないことを確認し、清掃員がビルの中に入っていった。

清掃員が、柏木警部と良平がいる警備室の前を通りすぎる。

「ちよつと待つてください。」

良平が警備室から飛び出してきた。

「何か。」

清掃員が振り返る。

「その中は何が？」

カーとを指差す。

「まだ何も入っていませんけど。」

「そうですか・・・失礼します!!」

突然良平が、カーとの中身を確認した。

そこには、何もない。良平は期待していた結果でなかったようで、再びカーバを戻した。

「何か問題ありましたか？」

「いえ、すいません。」

「そうですか、お仕事がんばってくださいね」

「あつ、はい・・・どうも。」

突然の言葉に良平は少し戸惑った。

3F 仕事場

大竹は仕事をしていた。

「くそ、集中できないな。」

席を立つ。

刑事相手には、気にしていないそぶりを取っていたが、やはり気になる。

（何が怪盗だ、、）

大竹が自動扉に近づいたとき、前から清掃員が入ってきた。カートを引いていて、前が見えていないようだ。

「すいません、ちょっと手伝ってもらえますか？」

「ああ」

しぶしぶカートを押すのを手伝う。

予想以上に重い。

（こんなにもいったい何が入ってるんだよ）

「助かりました。」

清掃員が頭を下げた。

大竹はその場から離れようとした。

その時異変に気がついた。メモリスティックがない。

「ない!？」

大竹は、慌てて周囲を見渡す。

「探してるのは、これ？」

清掃員が、左手に持っているメモリスティックを示した。

「そう、それだ。」

大竹は、当然のように、メモリスティックに手を伸ばす。
伸ばした手は空を切る。

「返すわけにはいかないの」
清掃員が強い口調で言った。

「何？」

大竹は、どうして今あつたばかりの清掃員に、
こんなことを言われているのが、すぐに把握できなかった。

「何を言ってるだ、どうしてお前にそうなう風に・・・」

だんだん状況がわかってきた。

「まさか！お前が・・・セイントテールか」

「ご名答」

「くそ！！警察のやつらは何をやってるんだ！！」

「さあ？ちようどここは、防犯カメラからは死角になってるの。」

どんなにカメラの映像を見ても、気づかないでしょうね。」

「だったら、俺が捕まえてやるよ！！」

大竹は、セイントテールに飛び掛ろうとした。

が、カートが行く手を阻む。

「ぐっ」

強引にカートをどかそうとする。

「これ以上、騒ぎにしたいくないから、おとなしくしてね」

セイントテールが、的確に大竹の顔に睡眠薬を吹きかけた。

「なっ、この・・・」

大竹は、何とか抵抗してセイントテールに近づこうとする。
だが、そのまま地面に崩れ落ちてしまった。

「何も動きがありませんね」

良平は、防犯カメラを見て呟いた。

「予告時間は、もう過ぎてるな。」

柏木警部は時計に目をやる。

予告時間が過ぎてても、目立った動きがない。

2Fの防犯カメラには、少し前に席を立った大竹の席が映し出されていた。

「柏木警部!!」

無線に連絡が入った。

「なんだ」

「近くの車の中で、清掃員が眠っているのを確認しました。」

「清掃員が・・・ってことは、さっきの清掃員は、セイントテール
!!」

「ビル内に放送を流しましょう」

良平が提案した。

2F。

セイントテールは、清掃員の格好のままで、フロアの清掃を続けていた。

今動く時ではないからだ。

『ビル1Fの警備についている警察官は2Fに向かえ。

2Fにいる清掃員はセイントテールだ。』

（気づいたか・・・）

2Fの入り口から、警察官が入ってきたのがわかった。

（そろそろかな）

セイントテールは、手に持ったスイッチを押した。

同時に、周りが暗闇に包まれる。

（今の内にと・・・）

セイントテールは、清掃員の格好を脱ぎ捨てた。

（やっぱりこの格好のほうが動きやすいな）

セイントテールは、急に辺りが暗くなり戸惑っている警察官の横を、気配を感じさせるまもなく、駆け抜ける。

目指すは、1Fの裏口。

「増田さん、準備は大丈夫ですか？」

良平が小声で無線に話しかける。

「ばつちりです、いつでもこいつて感じですよ」

「きたらすぐに合図をください。」

「わかりました。」

（良平達がない・・・）

セイントテールは、少し疑問に思いつつ、1Fの裏口にたどり着いた。

少しだけ慎重に、裏口の扉を開ける。

特に変わった様子はない。

増田刑事は、ちょうど体が収まるぐらいの物置の中にいた。裏口から続く一方道のちょうど端っこに位置している。

ここから、セイントテールが出てくることを監視していたのだ。

（来た！！）

目線の先に、セイントテールの姿をしっかりと確認できた。

（柏木警部、現れました。セイントテールです。）

（了解）

セイントテールは、裏口の一本道を、慎重に歩き進んでいた。

「これ以上、先には行かせない！！」

目の前の物置から増田刑事が飛び出してきた。

「増田刑事！！」

突然現れた増田刑事に、セイントテールは身構えつつ、少し後ずさる。

「今度はこの前のように、簡単にやられないよ」

増田刑事には、目に分かるぐらい気迫に満ち溢れていた。

下手に相手にしないと判断したセイントテールは、後ろを振り返った。

そこに現れたのは、増田刑事の合図で飛び出した良平、柏木刑事。

「そこまでだ、セイントテール!!」

（良平、柏木刑事!!）

裏口の前の通路は、幅が狭い。一人がやっと通れるほどだ。そのため、良平は、

ここにセイントテールを誘い込むことがベストと考えたのだ。

「うまく誘い込みましたね、柏木警部」

良平は、作戦がうまくいったことに興奮を隠せない。

「わざと、1Fの警備を薄くしたってこと？」

セイントテールは、両側から少しずつ迫ってくる良平達を警戒しながら聞いた。

「さうさ、そこにお前はまんまと現れたって事さ」

得意げに良平が話す。

「さあ、観念するんだ。セイントテール」

良平は、少しずつセイントテールとの距離をつめる。

セイントテールは、何も言わず、笑みを浮かべた。

「何がおかしいんだよ」

良平は、その態度が気に食わない。

「別に」

セイントテールはそっけなく返す。

そして、右腕を振り上げ、そのまま何かを地面に投げつける。

同時に白い煙が、セイントテールの姿を包む。

あっという間に良平の所に煙が充満してきた。

「そんなことしたって無駄だ、逃げ道はないんだ!!」

何も見えない視線の先に向かって、良平は一目散に突っ込んだ。
どこにも逃げられるはずがない。
見えていなくても関係ないはずだ。

ごっ！！

何かに当たる音。

「いてっ！！」

声は上げたのは、良平と増田刑事。
ぶつかったのはこの二人だった。

間にいたはずのセイントテールが消えた。

「どこに行った？」

柏木警部が叫んだ。

「なんで？」

良平も事態が把握できない。

「ちゃんと確認しないから」

良平の頭上から、セイントテールの声がした。

徐々に晴れてきた煙の中から、

壁の頂上に腰掛けているセイントテールが姿を現した。

「いつの間に??」

「残念でした、じゃあね」

そういつて、セイントテールは壁の向こう側に姿を消した。

「早く追え」

柏木警部が指示を出す、狭い通路があだとなり、
思うように身動きが取れない。

「くそ」

良平の声がむなしく響いた。

第3話

「今日もなかなかの成果だったな」

とあるアパートの一室で、男が小さな箱に入った宝石を、まじまじと見つめていた。

男の部屋は、格別大きいわけではなく、どこにでもあるアパートである。

そこにあまり似つかわしくない宝石が、男の前に置かれていた。男の名前は、高山。23歳。フリーター。

「ほんとにあの店は、俺にとっては救世主だな」

少し前までは、フリーターとして普通の貧乏生活を送っていた。それが、激変した。

ある日、働いていた宝石店で見つけた。

監視カメラに死角があることを。

その日以来、定期的にそこから宝石をくすねている。ばれないように慎重に。

幸い、店長はだいぶ年がいており、気づいていない。

盗んだ宝石を売り、金に換えていた。

- - -
- - -
- - -

「もうすぐ文化祭だね」

いつものように、登校しているあおいと良平の姿があった。

「あゝ、もうそんな時期か。」

あいかわらず、良平は無関心に返す。

「また何か考えてる」

「あと一歩だと思っただけだな・・・」

「良平がそう思ってるだけでしょ」

「いや、今度こそ・・・!」

「はいはい」

もはや定番になってきたこのやりとり。

- - -
- - -
- - -

警察署

「ほら、もつとがんばれ!!」

柏木警部の怒号が飛ぶ。

そこには、筋トレに励む橘刑事と増田刑事の姿。

「何で急にこんなことするようになったのですか？」

増田刑事が今にも倒れそうになりながら聞いた。

「この前は、挟み込んでおきながら何もできずに逃げられたからな。」

「僕はこの前いなかったじゃないですか？」

非番でいなかった橘刑事は、どうして自分がという気持ちだ。

「特にお前が見た目体力がなさそうだからな・・・」

「体力をつければいいってもんでもないでしょうが」

橘刑事が小声でつぶやいた。

「何か言ったか？」

「いえ。」

- - -
- - -
- - -

放課後、商店街。

あおいが、一人で歩いていた。

そこに突然大声が飛び込んできた。

なにやら前の店でもめているようだ。

「なんだろ・・・」

あおいが声がした店のほうに近づいていく。

「あなたが盗ってるんでしょ!!」

若い女の子の声がした。

「何いつてるんだ!!余計な言いがかりをするな」

答えたのは、高山だった。

言い争っていたのは、高山がバイトしていたあの宝石店だった。

高山に詰め寄っていたのは、その店主の孫、坂本愛美だった。

「これ以上、言うんだったら証拠でもあるんだろっな!!」

「それは・・・」

証拠があるわけではなかった。

ただ、高山がバイトをしている日に限って、宝石がなくなっている。

「愛美、どうしたの?」

そこに、あおいが入ってきた。

愛美と葵は同じ高校の同級生だった。

「あおい、実はね、」

「とにかく、俺はやっていないからな」

高山は店からでて行こうとした。

「あつ、待ちなさいよ!!」

愛美が詰め寄ると、

「しつこいぞ!!」

高山は、愛美を振り払った。

その反動で愛美はバランスを崩した。

「ちよっと、何するんですか？」

今度は、あおいが食いかかったが、

高山は取り付くまもなく出て行ってしまった。

「大丈夫、愛美」

あおいが、愛美の体を起こした。

「うん、大丈夫。ごめんね、変なところ見せちゃって」

「いいよ、それより何があったの？」

愛美は、あおいに事情を話した。

「ひどい、すぐに警察に行ったほうがいいよ」

「うん。でも、そこまで証拠があるわけじゃないの。

だから、どうすることもできなくて・・・」

「そっか・・・」

あおいは、胸の奥底で、ある決意をしていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

P M 3 : 0 0 警察署

「柏木警部、またセントテールからの予告状が届きました。」

増田刑事が、予告状を片手に持ち部屋に入ってきた。

「おう、見せてみる」

『明日 P M 9 : 0 0 矢島アパート 2 0 6 号室より、宝石をいただきに参いります。 怪盗セントテール』

「また、急ですね」

橘刑事が言った。

「とりあえず、現場に急ぐぞ。良平にも連絡しておいてくれ」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

矢島アパート 206号室

「気分が悪いな」

高山は、先ほどの出来事を思い出していた。

今後、今までのようにうまくいかなくなることは明らかだった。

「下手なことになる前に、いつそすべて売りさばくか。」

高山がそんなことを考えていると、ベルが鳴った。誰かが来た。

「なんだ、こんなときに」

高山がドア越しに誰かを尋ねる。

「警察のものです。」

言われてドキツとしたが、慎重に姿を確認する。

警察手帳を差し出している。

高山はドアを開けた。

「なんですか？」

高山の問いに、柏木警部が答えた。

「セイントテールはご存知ですか？」

いきなり何を聞くのかと思った。

「えー、知ってますよ。世間を騒がしている怪盗ですよね」

「その怪盗から、予告状が届きました。」

「予告状？」

「そうです。あなたの宝石を盗むと書かれています。」

そういつて、予告状を高山に手渡した。

「宝石ってなんですか？」

「それはこちらが、聞きたいことです。」

「そんなものもっていませんよ。」

「セイントテールに標的にされる人は大概そう言います。」

高山の言動をさえぎったのは、良平だった。

「何です、このガキは？」

高山は、苛立ちから言葉が荒くなる。

「警備に協力してもらっている高校生です。それより本当に心当たりがないんですか？」

「あーないですね。」

「部屋の中を見せてもらってもいいですか？」

「その必要はないです。確か、強制力はないですよね。」

返事を聞く前に、高山はドアを閉めた。

「・・・あやしいですね。」

橘刑事が率直な感想を漏らした。

「まあ、礼状があるわけじゃないからな。ここで無理に入るわけにはいかん。」

「明日まで、監視をしたほうがよさそうですね」

良平が言った。

「そうだな。」

「くそ」

先ほどよりさらに虫の居所は悪い。

「何でこのタイミングで、怪盗にこれを狙われないといけないんだ・
」

目線を手に持っているジェラルミンケースに移す。

つい今、売りに行こうとしているところだったのに、

これでは売りに行くことすらできない。

（どうすればいいんだよ。）

ふと、机の片隅に置かれたスタンガンに目が止まった。
（自分の身は自分で守るか・）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

良平は、アパートの屋上に来ていた。6階建て。
このアパートは上から見ると、V字型になっており、
真ん中が吹き抜けになっていた。
206号室がある東側の向かいには、同じぐらいのビルが道一本を
はさんで建っていた。

アパートの一室ということもあり、警備はしやすい。
警戒すべきところは、玄関と反対側のベランダのみだ。
いつもの4人+数人でも、十分警備することができる。

（今度こそ、捕まえてやるぞ、セイントテール）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

予告日 予告時間30分前

「ベランダには必要ないです」
「しかし・・・」

「警察の人たちは、侵入されないようにしっかりと監視すればいいで
しょう」

高山はそれだけ言うと、ドアを閉めた。
「ベランダは、あきらめたほうがいいですね。」

良平が柏木警部に言った。

「そうだな。ベランダに着く予定だったのに、どうするんだ？良平」
「そうですね」

ベランダには、良平が入る予定だった。

「とりあえず、いろいろ動いていようと思います」

「わかった、連絡はこれを使ってくれ。」

手渡したのは、いつもより小型化された無線イヤホンだった。

「わかりました。」

（あー言っただけど、どこにいようかな）

良平は、歩きながら考えた。

玄関には、柏木警部。屋上には増田刑事。向かいのビルには橘刑事。
アパートの表入り口と裏口に警官が一人ずつ。

今回で言えば、これで十分に思えた。

とりあえず、非常階段に腰を下ろし、予告時間が来るのを待った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「向かいのビルが橘刑事、屋上に増田刑事か。」

セイントテールは、警備状況を確認していた。

「ということは、正面が柏木警部ね。」

良平は・・・ベランダかと思ったけどいらないみたいね」

少し辺りを見渡したが、姿は確認できなかった。

（まっいつか）

セイントテールの姿が闇の中に消えた。

予告時間

「そろそろ時間か」

良平は、腕時計に目をやった。

立ち上がるうとした瞬間、音が辺りに響いた。

「なっ」

良平は、柏木警部のいる場所に戻った。

戻りながら上空を見上げると、空が明るくなっているのがわかった。

「これは？」

柏木警部も事態をよく把握していない。

「増田、どうなっている？」

無線で屋上の増田刑事に確認する。

「花火です。花火が上がってます。」

「花火!？」

良平は、なぜこんな時にと疑問に感じた。

「橘、異常はないか？」

「はい、異常はありません」

異常はない。そう思ったが、良平には少し違和感があった。

それがどこかは今は分からなかった。

「引き続き、警戒を続ける」

（うまくいったかな・・・）

セイントテールは、既にベランダに潜んでいた。

花火に注意が移った瞬間に、向かいのビルからアパートに移動していた。

向かいのビルにいた橘刑事は、すでに夢の中だ。

先ほど返答したのは、セイントテールだった。

- - - - -

部屋の中。

（なんだこの音。）

部屋のベットに包まっていた高山は、突然鳴り出した音が気になっ

ていた。

（現れやがったか、セイントテールが。）

手に持っているスタンガンに力が入る。

しかし、少したっても何も変化がない。

少し拍子抜けになった。

そう思った矢先、ベランダから声が聞こえてきた。

「高山さん、セイントテールが現れました。」

声は、先ほどの高瀬とかいう高校生のものだった。

ベランダの警備はいらないといったのに、勝手に警備していたのか。
。。

（勝手なことをしやがって）

「そこにいては危険です。こちらか逃げてください。」

「その必要はない!!」

ベッドから起き上がり、ベランダへ出る。

が、誰もいない。と思った瞬間、

ガッ!!

後頭部に衝撃が走った。それと同時に記憶が飛ぶ。

スタンガンが出番なく、地面に落ちる。

「しばらく、眠ってなさい」

セイントテールは、高山を見下ろしながら言い放った。

（さてと、気づかれる前に・・・）

- - - - -

（もう、予告の時間なのに、何の動きがないのはおかしいな）

良平は考えながら、屋上に向かっていった。

屋上には、増田刑事が警備している。

「異常はないですか？増田刑事」

「特にそれらしいことはないよ。」

「そうですか・・・」

良平は、屋上から周りを見下ろした。

特別変わった様子はない。

（後は、橘刑事か・・・）

「橘刑事、良平です。異常ありませんか？」

良平は、階段を駆け下りながら、無線に問いかけた。

一瞬の間があつた。

「橘です。異常はなし。」

前回と同様、異常なしの知らせ。

もちろん答えたのは、セイントテールだ。

「部屋の様子もですか？」

「カーテンがかかっていて、中の様子までは分からないが、変わった様子はないね。」

「そうですか・・・」

同じころ。玄関前の柏木警部。

何も変化がないことに、イライラが募り始めていた。

「くそ、どうして何も起こらない。」

柏木警部は、玄関のドアをたたき始めた。

「高山さん、変わったことはありませんか？」

何度もたたく。返事がない。

「変わった事はないんですか？」

再度呼びかける。

（せっかちな〜。）

セイントテールは、橋の声で良平とやり取りをしながら、
玄関から聞こえてくる柏木警部に耳を傾けていた。
もう少しで、全ての宝石の回収が完了する。

良平がちょうど、2階に到達しようとした時に、
違和感に気づいた。直に、聞こえてくる柏木警部の声の後に、
かすかに無線の中から柏木警部の声が聞こえてくる。

（橋刑事がいるところからは、柏木警部の声は聞こえないはず・・・）

「セイントテールか！！」

良平は思ったことをそのまま声に出した。
ちょうど玄関の前に来ていた。

「柏木警部、中にセイントテールがいます。」

柏木は借りていたマスターキーを取り出そうとする。

「ご名答」

無線から、セイントテール本人の声が返ってきた。

「自分はベランダの方に回ります。」

全速力で向かいの道路に飛び出した。
しかし、セイントテールの姿はない。

「柏木警部、そちらはどうですか？」

「中に入れない！！内側からロックがかけられてる！！」

「セイントテールは、まだいますか？」

「わかん。」

（まだ、部屋の中か）

良平は、階段に戻り、途中から2階のベランダへと飛び移った。
非常用入り口を突き破り、高山のベランダに到達する。

ドアを開けて、部屋に入る。

誰もいない。

慎重に一步步つ辺りを見回しながら入っていく。

玄関のロックをはずす為に、玄関に近づこうとした瞬間、
背後で人の気配を感じた。

振り返ると、そこにはセイントテールの姿が。

「セイントテール!!」

「こんばんは。そしてさようなら」

セイントテールはさういうと、必死にこちらに向かってくる良平を
尻目に、

身体をひるがえすと、タイミングを見計らったように扉を閉める。
そこに、良平が飛び込んだ。

ガッ! ! ! .

「くそ。」

何とか体勢を整えて、扉を開けようとするが、なかなか開かない。
よく見ると、扉の明け口に棒がセットされている。

目の前でセイントテールが軽くジャンプして視界から消えた。

その後、玄関から、柏木警部とともに追いかけたがとき既に遅し。
セイントテールの姿はどこにもなかった。

向かいのビルからは、眠りについた橘刑事が発見された。

第3話完

-
-

第4話

「セントテールから予告状が？」

清風高校の校長は、驚きから声を上げた。

「そうなんです。先ほど警察の方がこられまして・・・」

教頭が答える。警察から受け取った予告状を机に置く。

『今週土曜日、貴校所有の四季の巻物をいただきに参ります。
盗セントテール』
怪

「まさか気づいて・・・」

「そんなはずは・・・」

「とにかく、絶対に守らなければ・・・」

「警察に任せるしか・・・」

「ダメだ。いつも逃げられてばかりの警察に任せておけるか。」

「では、どうすれば・・・」

「それを今から考えるんだろうが！！」

「すいません・・・！！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「おはよ、良平」

「ああ、おはよう・・・」

「毎回、毎回落ち込まないでよ。逃げられたからって」

「うるさいな、関係ないだろ、あおいには」

「はい、はい。余計なお世話でした。」

あおいは、良平の方を見ずにそっけなく答えた。

そんないつもやり取りをしていた二人の目に現れたのは、
あおいの親友のサエコだった。

「ねえねえ、聞いた？」

「何の話？」

「うちの高校に、セイントテールから予告状がとどいたらしいよ」

「そうなんだ」

「あれ！？驚かない、セイントテールだよ」

「えっ、あーそうだね。すごいね」

サエコは、話の先を良平に向けた。

「良平も聞いている？あんたの追っかけてるセイントテールだよ。」

「えっ、何の話だっけ？」

「セイントテールの話！！」

「セイントテール・・・セイントテール！？」

急にスイッチが入った。それを見ていたあおいは少し嫉妬を感じた。

（セイントテールって聞いた途端にあんなに生き生きして・・・）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「セイントテールが、うちの高校に予告状を？」

良平は、柏木警部からの電話に出ていた。

朝、冴子から話しは聞いていたが、にわかに信じられず、確認のため電話したのだ。

「今週の土曜日だ。」

「今週の土曜日・・・それでどうするんですか？」

「それが、校長からは何の連絡もなくてな。こっちも困ってるんだ。」

「連絡がないって？」

「予告状を渡しにいったんだが、後で連絡しますと言われたきりな

んだ。」

「それきりつて、予告日は明後日ですよ。」

「そうだ、日がない。今日放課後そちらに伺おうと思ってる。」

「その時に、俺も立ち会っていいですか？」

「それは、・・・まあかまわん。目に付かないところで聞いてろ」

「ありがとうございます。」

「柏木警部に電話？」

背後からいきなり声をかけられてびつくとした。

「なんだよ、びつくりするだろ、あおい」

「今日来るの？」

「あおいには、関係ないだろ」

「はいはい、そうーでした。勝手にすれば」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「警備は必要ない？」

柏木警部が、思わず声を上げた。

「そうです。警察の警備は必要ないといっているんです。」

校長は、当然と言わんばかりの口調だ。

「あのですね。そう言われましても・」

「警備する義務があると」

今度は、教頭が申し訳なさそうに話した。

「そうです。我々としては、はいそうですかと引き下がるわけには
いきません。」

「だったら、本校に進入されないように、周りを見張っていてくだ
さい。」

これは、私たちが守りますから。」

今回のターゲットである「四季の巻物」を指差し、校長は柏木警部

に言い放った。

「しかし・・・」

「周りの見張りも、立派な警備だと思いますが・・・」

「わかりました。これ以上話しても無駄なようですネ。」

「よろしく願いますよ、警部さん」

廊下に出た柏木警部。

「いいんですか？このままで」

廊下で話を聞いていた良平が問いかけた。

「仕方ないだろう。これ以上こつちからはどうすることもできん。」

「そうですか。」

「まあ、今回は、お前に任せるよ。お前の高校でもあるしな」

「わかりました。任せてください。今度こそ、捕まえてやりますよ」

「いいんですか？あんなこと言つて。」

教頭が校長に聞いた。

（警察に任せられるか。下手に調べられても困るだろ）

（そうですが・・・警備のほうは）

「この金庫に入れて、見張っておけばいいだろ。」

「それじゃあ、盗まれますよ。セイントテールに」

良平が、校長室に入ってきた。

「何ですか、君は？生徒が勝手に入ってこれる場所ではないですよ」

教頭は、突然入ってきた自分の生徒に驚いた。

「どういことですか？」

校長は、生徒が言ったことが気になる。

「言葉のとおりです。そのぐらいでは、セイントテールの前では無力です。」

「では、どうすれば・・・」

校長の頭には、なんでよいのでこの「四季の巻物」を守ればよい

気持ちになっていた。

「自分たちの高校なんですから、自分たちで守りましょう」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「で、こうなつたんだ」

あおいは、掲示板に張つてある紙を指さした。

『警備求む！！ セイントテールを捕まえよう！！』

「そ、自分たちのものは、自分たちで守らないとな」

良平は、その紙をあちこちに張りまわっている。

「自分たちのもの・・・ね」

「えっ。何か言つた？」

「ううん。なんでもない。それで人は集まつたの？」

「それが、100人以上もう集まつててさ。」

「100人か。結構集まつたね」

「これで、4分割して警備するっていうのもできるかなつて」

「さっきも言つてたけど、4分割なんかしたら警備が手薄になるんじゃない？」

「まあ、そうなんだけど。裏を返せば、捕まえるチャンスが4回になるって考え方もあるだろ」

（そんなことか・・・単純）

「今度こそ、捕まえてやるさ。覚悟しとけよ、セイントテール」

「まあ、がんばつてね」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

- - - - -
予告日当日。

清風高校は、いつもと違う土曜日を迎えていた。
日が暮れ始め、辺りは薄暗くなり始めた。

警備する箇所は4箇所。

校長室、体育館、1 - 2教室、音楽室。

高校のおおよそ東西南北に位置する場所だ。

校長室は、校長と教頭のみ。

それ以外の箇所は、約50人。

募集で集まったのは最終的には、200ほどになっていた。
人数だけで見れば、過去にセイントテール警備では最大人数となる。

高校の周りには、柏木警部ら4人。

「良平、中の様子はどんな感じだ？」

柏木警部は、無線で中にいる良平と連絡を取っていた。

「いつもと違って、とても賑やかですよ。」

「賑やかっとな。そんなので大丈夫なのか？」

「まあ、人が多くて困ることもないでしょう。」

それに、セイントテールが進入したら、警部達も中に入ってくる気なんでしょう？」

「うっ、．．まあそうだが」

「頼りにしてます。」

良平は、無線を切り、歩きながら考えていた。

（セイントテールなら、どこから狙ってくるか．．）

（こう見ると、やっぱり人多いな）

セイントテールは、清風高校が見渡せる高台のビルの屋上にいた。
(多いだけでは、意味がないってね)

- - - - -
- - - - -
- - - - -

(そろそろ時間か・・・)

良平が、高校のちょうど真ん中に位置する広場に差し掛かった時だった。

「セイントテールだ!!」

どこかで大声が上がった。

その声に誘われるように、それぞれの場所にいた生徒達が、声が上がった場所に移動し始めた。

(現れたか・・・いやこれはいつもセイントテールが使っ・・・)

「みんな、そっちじゃない。」

良平が声を上げて、流れは変わらなかった。

(くそ!!)

声が聞こえてくるのは、体育館の方から。

その反対側、音楽室に走った。

(一番手薄になるのは、音楽室だ。)

音楽室。

「おい、なんか体育館の方で、セイントテールが現れたみたいだぞ。」

「

俺達も行ってみるか?」

「でもこの警備はどうするの?」

「ここで待ってれば、ここにも現れるだろ」

「これだけいれば、大丈夫だろ。ちょっと行ってみようぜ。」

混乱しつつも、その場を離れるもの、とどまるものがいた。

「こんばんは」

突然、女の子の声が辺りに響いた。
声はセイントテールのものだった。

「何だこれ。」

「セイントテールか？」

辺りがさらに混乱する。

「あそこにいるぞ。」

どこからともなく聞こえた声に、残っていた人たちが一斉に飛び出した。

近くにいたのであれば、黙っていられない。そんな感じた。

先ほど声を上げた張本人、セイントテールは、誰もいなくなった音楽室にさっそうと降り立った。

中央にある箱の巻物を手に取る。

「春の巻物か・・・」

「セイントテールは、音楽室だ!!」

遠くから、良平の声が聞こえてきた。あと少ししたら、ここに来るだろう。

「ふふ、少し遅かったね・・・」

音楽室に続く廊下。

虚を疲れた二人は、体をピックと反応させた。

「誰だ？」

「セイントテールか？」

声は聞こえるが、姿が見えない。

「あなた達に、後ろめたいことがあるからでしょ。」

「くそ、どこだ。」

校長は、扉をあけ、廊下に出た。

声の出所を探ると、端っこにスピーカが置いてあり、そこから発せられていた。

「なめた真似を」

スピーカをOFFにする。

「あっ！！」

部屋の中から、教頭のあえぎ声が聞こえた。

「どうした？」

校長が慌てて中に戻ると、そこには地面に崩れ落ちた教頭と、その近くにセイントテールの姿があった。

「お前がセイントテールか。」

「あなたは、前の校長から四季の巻物を騙し取った」

「うるさい、あれは譲り受けたんだ。」

「そんな言い訳、通用すると思う？」

「俺のものだ！！」

校長は何の策もなく、セイントテールに向かって突進した。

セイントテールは、予備動作なく、校長を跳び箱のように踏み台にし飛び越えた。

後ろに回りこむと同時に、校長の後頭部に手刀を入れる。

校長はそのまま気絶し、地面に崩れ落ちた。

「巻物はあの金庫か・・・」

校内に入った柏木警部達は、3人それぞれ別れて、セイントテール探索を行っていた。

残りの場所の近くを見回るため、それぞれ別れていた。

校長室の付近を見回っていたのは、橘刑事だった。

校長室付近は、元々生徒はおらず、静まり返っていた。

「捜すっていつでもな・・・」

周りに人の気配はない。

校長室の前の廊下に差し掛かった。校長室から光が漏れている。中はとても静かだった。様子を伺おうとするが、中が見えない。

（静か過ぎる・・・）

橘刑事は、外側に回ってみた。

カーテンが敷かれていたが、一部から中の様子を見ることができた。できる限り、周囲を見回した。

「金庫が開いてる」

（もう、セイントテールに入られていたか・・・）

いや、扉が開いている。さっきは開いていなかった。ついさっきまで、中に・・・）

「紙一重っていうのはこういうことですか」

橘刑事は、急いで廊下に戻った。校長室の中に入るがそこには、地面に倒れている校長と教頭。

ものけのからになった金庫だけだった。

辺りを見回すが、セイントテールの姿は見当たらない。

「橘です。校長室がやられました。」

無線で連絡を取る。

「お前、本当に橘か？」

柏木警部が、疑問をぶつける。

過去に、橘刑事に化けたセイントテールにやられているからだ。

「本物ですよ。」

「ならいいけどな。」

あまり信用していない柏木警部。

「今ここで話しても、あまり意味がないですよ。」

とりあえず、橘刑事は、残り2箇所の警備に移ってください。

校長室は、僕が行きます。」

良平が指示を出す。

「わかった。俺も、念のためそっちに向かう。」

残りの二人は、残りの警備しつかりしろよ」

柏木警部が続く。

「わかりました。」

二人がほぼ同時に返した。

1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	7
8	8
9	9
10	10
11	11
12	12
13	13
14	14
15	15
16	16
17	17
18	18
19	19
20	20
21	21
22	22
23	23
24	24
25	25
26	26
27	27
28	28
29	29
30	30
31	31
32	32
33	33
34	34
35	35
36	36
37	37
38	38
39	39
40	40
41	41
42	42
43	43
44	44
45	45
46	46
47	47
48	48
49	49
50	50
51	51
52	52
53	53
54	54
55	55
56	56
57	57
58	58
59	59
60	60
61	61
62	62
63	63
64	64
65	65
66	66
67	67
68	68
69	69
70	70
71	71
72	72
73	73
74	74
75	75
76	76
77	77
78	78
79	79
80	80
81	81
82	82
83	83
84	84
85	85
86	86
87	87
88	88
89	89
90	90
91	91
92	92
93	93
94	94
95	95
96	96
97	97
98	98
99	99
100	100

「くそ、またやられたか。」

柏木警部は、校長室に向かいながら、

セイントテールにしてやられている状況に苛立っていた。

渡り廊下を抜けた時だった。

!!

曲がり角から出てきた女子高生とぶつかった。

「すまん。大丈夫か？」

「大丈夫です、警部さん」

女子高生は、そのまま、行ってしまった。

それほど多くはないが、警備場所以外にも、学生の姿はよく見かけられた。

「これだけいけば、誰か見つけてもいいものだが」

柏木警部は疑問に持ち始めた。

と同時に、異変に気づいた。

「警部さん・・・!?」

（何で俺が、警部だとわかったんだ・・・）

「学生の中にまぎれていやがったか・・・」

そう考えると、これだけ探して見つからないのもわかる。

「セントテールは、女子高生の姿をして紛れ込んでるぞ。」

無線に連絡を入れる。

「本当ですか？」

今度は、橘刑事から少し疑惑の念をこめた返事が返ってきた。

「本当だ。一人でいる女子高生は特に注意しろ。」

校長室前の廊下には、良平が既に到着していた。

「どうだ？」

「だめです。やられています。」

「残り2箇所。2人づつにするか、一箇所に集中させるか・・・」

「後手後手に回ってますね。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

体育館の屋上

「こんなところ、普段じゃ絶対こないだろーな」

セイントテールは、体育館の屋上にいた。

さすがに人気はない。

そこから、体育館の中を見る。

中央に台が置かれていて、周りを無造作に学生がいた。

「よつと・・・」

体育館の屋根に上り、中央まで到達した。

そこは通気孔になっていて、少し力を加えると、一人一人が通り抜けられるようになっていた。

下には、中央に置かれている台が見える。

「そろそろかな・・・」

（良平達はいないみたいだけど・・・）

台の近くには、姿が見えない。

体育館横。

「どこにいるかなんて関係ない。現れたところを捕まえてやる」

良平達4人は、体育館に絞り警備に当たっていた。

計4箇所の扉から、それぞれ中の様子を伺っている。

バツ。

突然、体育館の灯りが消えた。

「なんだ!？」

中にいる学生が、混乱し始めている。

「現れたか、セイントテール」

良平は、体育館の中に入る。暗くて前が見えない。

何も見えない中、なんとか台の方へ向かおうとする。

台の周りから、ほんの少し光が漏れているのがわかった。
そこに、上から吊り下げられた紐のような一本の線が伸びている。
視線を落とすと、台に手を伸ばすセイントテールの姿があった。

「秋の巻物、いただき」

「セイントテールだ！！台のところにいるぞ。」

良平の言葉に、混乱していた一部の学生が、セイントテールの姿を
発見した。

セイントテールに向かっていく。

「つと、」

（良平、いたんだ）

セイントテールは、垂れ下がっている線を手に取り、スイッチを押
した。

セイントテールの身体が宙に浮き、屋上へとあがっていく。

「逃がすか」

良平がセイントテールに、飛び掛る。

良平の手が、セイントテールの右足に迫る。

が、後一步のところで、セイントテールが足を九の字に曲げた。

良平の手が空を切る。

「残念」

「屋上です。屋上に回ってください。」

無線で指示を出すと、良平も体育館を飛び出した。

増田刑事と橘刑事が、屋上へと続く梯子を上っていた。

「早く上がってください。増田刑事」

「そう言われても」

増田刑事が重そうな身体を、なんとか上に持っていこうとする。

「早くしないと、セイントテールに逃げられますよ」

「わかってるけど」

「そこ、あぶないよ」

突然上から声が飛んだ。セイントテールだ。

「古くなつてて、そんなに体重かけると、ほら・・・」

言ってるそばから、

ギッ、ギッ

「あっ」

「おい、何・・・」

二人の身体が宙に浮き、地面に落下した。

「ほら、言ったとおり」

セイントテールは、その光景を見て笑顔を見せた。

「さてと、最後の巻物をいただきますか」

「そこを動くな、セイントテール」

反対側の梯子から、柏木警部が姿を現した。

（動くなって言われて、動かないわけじゃないでしょ）

セイントテールは、屋上の東側に向かって走った。

「この」

梯子を昇り終えた柏木警部が後を追う。

セイントテールが向かった先には、1・2教室があるA棟へとつな

がる連絡橋があった。

連絡橋の上は、人が通ることは想定されておらず、逆V字型になっていた。

そこを速度を落とさずに、セイントテールが駆け抜けた。

「待て」

柏木警部もそれに続こうとするが、さすがに立ち止まる。

セイントテールは、そのまま屋上の扉へと近づく。

突然、その扉が開くのが分かった。

「――！」

セイントテールは咄嗟に反応し、扉の上に飛び乗った。

扉からは、良平が姿を現した。

セイントテールの動きを予測して、先回りしようとしたのだ。

「はあ、はあ。セイントテールは？」

あたりを見渡すが、姿が見えない。

「上だ――！」

体育館の屋上から柏木警部の声が聞こえた。

その声の通り、上を見る。

しかし、その途中で意識が飛ぶ。

セイントテールの手刀が、良平の首すじにヒットしたのだ。

「ごめんね、良平。そこで寝ててね。」

（ちよつと、びっくりしたかも）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「で、結局その後、1時間もそこで気絶してたんだ」

「そっだよ」

「柏木警部達に忘れられたんだ」

「仕方ないだろ。まだ、残りの巻物があつたんだから」

「まあ、そうなんだろうけど」

学校の帰り道。良平とあおいの二人が並んで歩いている。

結局あの後、セイントテールには、まんまと逃げられていた。

「あと少しだったんだ」

「毎回聞いてるけど」

「今回は、本当だ」

「わかった、信じてあげる」

あおいは、笑顔で良平に答えた。

第4話完

第5話

「セイントテール対策緊急会議ですか？」

良平は、突然かかってきた柏木警部からの電話でた。

「そうだ、お前も参加してくれ。」

「また、急ですね。」

「さすがに、上からきつく言われていてな」

「わかりました。すぐ行きます。」

「ああ、よろしくな」

「また、柏木警部から呼び出し？」

ああいが、良平に聞いた。

「セイントテール対策緊急会議だつてさ。」

「緊急会議か、そんなことしてもさ、またいつもと変わらないじゃないの？」

「知ったようなこと・・・こっちは毎回いろいろ考えてるだからな」

「そうなんだ」「まあ、そういうことだから、ここで」

「うん、じゃあまたね」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

清風警察署。

一階の隅に位置する、セイントテール専属室。

「何か案はないか？」

柏木警部が、橘刑事、増田刑事、そして良平に聞いた。

「案で言われても、何も思いつかないですよ」

増田刑事は、そもそもやる気がない。

「毎回、警備する環境が違つのに、今から作戦立ててもしょうがな
くないですか？」

橘刑事は、冷静に冷めた感じで言った。

「あーこいつらに聞いても、埒があかん。」

柏木警部が、チラッと良平の方を見た。

「俺もわかりませんよ。いい案があるなら、今までにやってますよ」
「そう言ってもな」

一向に進展しそつにない雰囲気が漂ってきた。

- - -
- - -
- - -

（緊急会議つて、何話してるんだろ・・・）

あおいは、帰り道を歩きながら、頭の中で想像してみた。

（ふふ、どうせうまくいってないんだろうけど）

「返してよー!!」

突然女の子の声が聞こえてきた。

（なんだろ・・・）

声の方に進むと、女子高生らしき女の子が、学生らしき男性2人に
詰め寄っている。

「しつこいぞ、あれは俺達のものだ」

「うそ、どうせ騙し取ったんでしょー!!」

「いいかげんにしろよ。」

男の内一人が、女の子に手を出す。

「きゃっ」

倒れそうになるところを、あおいが後ろからささえた。

「ちよっと、何するんですか。」

あおいが詰め寄る。

「何だ、関係ないやつは引っ込んでろよ」

今度は、あおいにつっかかってきた。

「警察呼びますよ。」

「おい、もういいさ。ほっとけ。」

もう一人の男がなだめ、そそくさと去っていった。

「大丈夫ですか？」

「はい、ありがとうございます。」

「余計なことかもしれないですけど、何かあったんですか？」

「・・・あいつらが、おじいちゃんの土地を・・・」

女子高生は、一部始終をしゃべり始めた。

「騙されて、気づいた時には、もう取り返せなくなってたってことか・・・」

「そうなんです。・・・すいません、変なこと聞かせちゃって」

「うっん、話してくれてありがとう。大丈夫、きっと悪い奴には天罰が下るから」

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

清風警察署

会議は思うように進んでいない。

そこに飛び込んできたのは、女性婦警。

「会議中、失礼します。」

前にもあったこのパターン。

「予告状か？」

「はい。」

『今週土曜日PM7：00、朝日大学農学部稲村研究室所有の土地
権利書をいただきに参ります。 怪盗セイントテール』

「土地の権利書か、まったく何を狙ってくるか、さっぱりだな」

「たしかに、毎回ターゲットは多種多様ですね」

良平が柏木警部に同調した。

「とにかく、現場に向かうぞ。良平もこれるか？」

「もちろん、行きますよ」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

朝日大学農学部 稲村研究室

「セイントテールが、土地の権利書を？」

「はい、そうです。」

柏木警部が、机の上に、予告状を差し出す。

「なぜ、セイントテールは、そんなものを狙うんですか？」

稲村教授は、明らかに動揺していた。

「それは、わかりません。セイントテールが狙うものは、様々です。」

今度は良平が答えた。

「なんですか、この子供は？」

「高校生ですが、セイントテール逮捕に協力してもらってます。」

「大丈夫なのかね、あんたら警察は、いつもセイントテールに逃げられてばかりと聞くが」

稲村教授は、警察をまったく信用していない。

「それは・・・」

柏木警部が言葉に詰まる。

「心配しないでください、教授」

突然研究室に、学生が2人入ってきた。

「俺達研究生が全力で守りますよ。なあ、海人。」

その内の一人で、海人と呼ばれた方は、

「そうですよ、相手は、女一人。」

それも、その高校生と同じくらいの年だという噂もあるぐらいです。

それこそ、毎回逃げられている警察の方々が信じられませんかどね」

かなり挑発的発言をする。

「そうそう、そういうこと。こんな高校生に頼っているようじゃ、ダメでしょ。」

そう言くと、良平の頭をぽんとたたいた。

「何するんだよ」

良平は、その手を払った。

「やめとけよ、雅史。言い争っても、メリットはないって。」

海人は、あくまで冷静に続けた。

「別に、警察の警備を断るわけではないです。」

ただ、ひとつ提案があるんです。」

「提案？」

良平が聞いた。

「そうです。土地の権利書は、2枚で1セットになってます。」

そこで、それぞれを警備するというのはどうでしょう？」

「どういうことだ。」

柏木警部はまだ、海人の意図が読み取れない。

「一枚を、僕達が、もう一枚は、警察の方々がとうことです」

「それなら、2枚をお互いが警備して・・・」

「警察が信用できないから、別々につてことだろ」

雅史は、極めてシンプルに答えた。

「そういうことです。これなら警察のメンツもたつと思いますけど」

「わかったよ。その案でかまわない。」

柏木警部はこれ以上何も言えず、渋々海人の案を飲んだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

朝日大学農学部 農地エリア

大学内に実際に栽培するためにある農地エリアに、柏木警部一行は案内された。

場所は、大学の北東側に位置していた。

「かなりの大きさですね」

良平は、想像していたよりもかなり広いことに驚いた。

「ええ、最近新しく土地を引き受けましね。」

それが、今回狙われているんですが」

稲村教授が答えた。

「だから、あそこからは何もまだ栽培されてないですね。」
良平が指差した。その先は、田んぼ跡になっていた。水は入って
おらず干からびていた。

「あそこです」

海人が指差したのは、プレハブ小屋だった。
農地エリアのだいたい中央に位置しており、農具を格納する倉庫や
休憩スペースになっているようだ。
そこの中から、権利書を取り出してきた。

「普段はここに保管しているんですか？」

良平が稲村教授に聞いた。

「ええ、普通の金庫で保管してます。狙われるようなものでもない
ですしね。」

「僕達は、あつちにある部室で警備します。警察の方々は、ここで
警備をお願いします。」

海人は、勝手に警備について話した。

良平は、もういちいち反抗するのはやめ、周りの様子を見回ってい
た。

「これは何ですか？」

端においてある壺の中身が気になり、手を入れてみた。

「ばか、勝手に突っ込むな」

雅史が、怒鳴った。

「わっ、何だこれ」

引き上げた手は、何かネバネバしたものがついてる。

「とりもちだよ。なかなか取れないぞ、勝手に突っ込むからだ」

「とりもち？簡単に作れるですか？」

良平は、水で洗いながら聞いた。

「市販もされてるけどな、俺達のはより粘着性が強い自家製さ。」
雅史が誇るように言った。

（とりもちか、セイントテールの動きを封じ込めるのに使えそうだな）

良平は頭の中で思案した。

「このとりもちって・・・」

「大量に作ることもできますよ。」

良平が話し終わる前に、海人が言った。

「僕も、良平君と同じ事を考えているんでね」

そう言って、良平の方を見る。

「・・・そうですか、お願いします。」

- - -
- - -
- - -

翌日、朝

良平とあおいが歩いている。

「そうなんだ、セイントテールの予告状がきたんだ。で、今回はどうなの？」

「どうって何が？」

「緊急会議した成果はでそうなの？」

「成果って言ってもな」

「結局、何にも決まってるないんだ」

「どつちに、現れるかな、セイントテールの奴」

雅史が笑みを浮かべる。

「どつちでも、かまわないさ。しっかり準備はしてきたんだ」
「そうだな」

プレハブ小屋付近

（そろそろ時間だな）

良平は、時計を見た。

手には、今回のために用意したある物が握られていた。

とりもちを、少し溶かして水風船に入れてある。

セイントテールのスピードを封じるためだ。

「あれは？」

外から橘刑事の声がした。

「どうしたんですか？」

良平が外に飛び出すと、橘刑事が指差していたのは空だった。

薄暗くなってきた空にかすかに何かが浮かんでいるのがわかる。

「セイントテールか？」

柏木警部が、叫ぶ。

「畏かもしれませんか。もう少し様子を見た方が。」

それに続こうとした、橘刑事、増田刑事を良平が制した。

「あそこにも」

「あっちにも」

橘刑事、増田刑事が続けて違う方向に、同様の物体を発見した。
よく見ると、複数個存在している。

「何だ？」

全員が上を見上げていた。

「上空ご注意願います。」

どこからともなくセイントテールの声がした。

その瞬間、上空の何かから落ちてきた。

「うわっ」

良平は、プレハブ小屋に逃げ込む。

「何だよこれ」

よく見ると、とりもちだ。とりもちが空から降ってきた。

逃げ遅れた3人の動きを奪う。

（くそ、やられた）

良平は、まさか相手がこの手を使ってくるとは思っていなかった。

（ここで、返り討ちにしてやる）

良平は、入り口から死角になる場所に身を隠した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「現れたみたいだな、セイントテール」

雅史が、部室からプレハブ小屋の様子を伺っていた。

「そろそろ準備するか？」

海人が言った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

（良平は、プレハブ小屋の中か・・・）

セイントテールは、プレハブ小屋に気配を消して近づいた。
（待ち伏せてわけ・・・）

（さあ、入って来い。）
良平は、バケツに入っている水風船を手にとって、入り口を注視した。

バツ！！

入り口のドアが開いた。
何かがそこから入ってきた。
「覚悟しろ！！」
水風船をそれに向かって投げつけた。

ビチャ

確かにヒットしたことを確認して、再度水風船を投げつける。
「よし」
良平は、入り口に近づいた。
「なんだこれ」
そこにあっただのは、人間の形をした風船だった。

「よく確認しないとね」
声が出た方を振り返ると、そこにセイントテールの姿があった。
「この」
手に持っていた残りの水風船を投げようとした。

ヒュッ！！

投げる前に、良平の上で水風船が割れた。

「うわっ」

突然のことに動揺した良平は、トリモチがべったりついた人型の風船に崩れ落ちた。

「しばらく、そこでじっとしててね」

セイントテールは、置いてあるバケツを手を取った。

「何するんだよ」

「こうするの」

多数の水風船が良平に放たれた。

完全に身動きが取れなくなってしまった。

そんな良平をよそに、セイントテールは、金庫から権利書を取り出した。

「確かにいただきました」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

プレハブ小屋を出たセイントテールは、部室に向かった。

部室の周りは、ライトアップされ、視界ははっきりしていた。

（誰もいない・・・）

セイントテールは、2階に飛び移ると、稲村研究室の扉に近づいた。
鍵はかかっていない。

見る限り人の姿は見えない。

（人の気配がする）

セイントテールは、ゆつくりと部屋の中に入った。テーブルの上に、金庫が置いてあった。周りを警戒しながら、金庫に手を伸ばす。中には、もうひとつの権利書が入っていた。それを手にした瞬間、

「ひっかかったな、セイントテール」
雅史が、隠れていた引き戸から姿を現した。手には、水鉄砲が握られていた。

「くらえ!!」
水鉄砲からトリモチを水で薄めたものが噴射される。

セイントテールは、飛び上がりそれを交わすと、入ってきた入り口に向かおうとする。

「そうはいきませんよ」
今度は、海人が入り口近くの物置から飛び出した。手にはトリモチ入りの水鉄砲が握られている。
後ろからは、雅史がじりじりとセイントテールとの距離を詰める。

セイントテールは、少し腰を屈め、前後二人の動きを注視する。
二人も、セイントテールとの間合いを図る。

雅人が再度水鉄砲を発射する。
セイントテールは横に交わす。
間髪いれずに、雅人が水鉄砲を発射する。
近くに落ちていたトレイでそれを受け止めた。

「このちょこまかと」

雅人がイラつきながら、水鉄砲を連射する。
標準が定まらず、まったくあさつての方向に飛んでいた。

セイントテールは、その隙に、雅人に近づき、水鉄砲を持つ手を蹴り上げた。

「がつー！」

水鉄砲が地面に落ちた。

「この」

拾おうとした雅人より早く、セイントテールが手にした。

「残念でした」

セイントテールは、水鉄砲を外に放り投げた。

「こんなはずでは」

計画通りに進まないことに、海人も落ちつきを失い始めた。

「ボーっ」とすると、あぶないよ」

海人は、対照的に落ち着いたセイントテールの声で、ハツとなった。

ビツチャ

水鉄砲を握った右手がトリモチがまとわりついた。

「くそ。」

振り回すが、取れない。

「策士、策に溺れるってこと」

気づくと、セイントテールが側にいた。

強引に水鉄砲の標準をセイントテールに向けようとするが、その前に、セイントテールの手刀が海人にヒットした。
海人はそのまま地面に崩れ落ちた。

「権利書、たしかにいただきました。」

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

「それから、どうしたの？」

「大変だったぞ、なかなか落ちなくて」

「そうなんだ」

あおいは、その姿が想像できて、少し笑えた。

「何笑ってるんだよ。」

「別に」

「笑ってただろ」

「笑ってないよ、ただ今回もセイントテールにやられたんだなって」

第6話

清風警察署 セイントテール対策本部

「突然だが、今日から一週間、新人研修の一環として、新人が1名配属される」

柏木警部がしゃべり始めた。

「新人研修はうちは担当外じゃないですか？」

橘刑事が言った。

「確かに、そうなんだが、他の課が忙しくてな。」

「忙しいからって回ってくるものじゃないでしょ」

増田刑事が続けた。

「セイントテールに逃げられてばかりだからな。そのせいでもあるんだよ」

「……」

「……」

二人はそれ以上、何もいえなくなってしまった。

「もうすぐ来るはずだが」

扉が開いた。1人の青年が入ってきた。

「おはようございます、笹本です。今日から一週間よろしく願います。」

セイントテール逮捕に協力できるようがんばります。」
見るにもやる気に満ち溢れている。

「この一週間で、セイントテールの予告があるとも限らん。
今からそんなに張り切っけていても、しょうがないぞ」
柏木警部が言った。

「それなら心配いりません。さつきこれを預かってきましたから」
そういつて差し出したのは、セイントテールからの予告状だ。

『今週土曜日21:00、桜木町、高橋邸の「天使の涙」をいただきに参ります 怪盗セイントテール』

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「なあ、セイントテールを捕まえるためにはどうしたらいいと思う？」

「えっ！」

良平に突然聞かれて、あおいはびっくりした。

「何よ、突然」

「だからさ、セイントテールを捕まえる方法」

（捕まえる方法って言われてもな）

「わかんないよ、そんなこと突然聞かれても」

「そうだよな、あおいにわかるわけないよな」

「ちよつと、何よその言い方」

良平は考え込んだまま、歩いていつてしまった。

「捕まつてたまるもんですか」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「失礼します。」

良平は、対策本部の会議室に入った。

「あつ、君が良平君だね。活躍は耳にしてるよ。」

突然握手を求められて、良平は困惑している。

「すいません。どちら様ですか？」

「今日から入った新人だ。一週間だけだけどな」

奥から、柏木警部が答えた。

「北見です。よろしくね。」

「よろしく願います。じゃあ、今回のセイントテールの警備にも」

「もちろん。夢に見たセイントテールの警備につかないわけじゃないか」

「なんか、すごいですね。」

良平は、北見の出す雰囲気圧倒されていた。

「ミーハーな気分が抜けてないよね」

「そうそう、そんなに甘いものじゃないのにね」

橘、増田両刑事が、冷ややかに言った。

（新人の刑事さんか・・・）

「さあ、始めるぞ」

「ひとつ、案を思いつきました」

良平が早々に切り出す。

「北見刑事に切り札になってもらいましょう」

「僕が切り札に？」

「どういうことだ？」

「セイントテールは、新人さんが来たことは知らないはずですよ。そこは利用できると思うんです。」

「そうですか・・・」

「何か、心当たりがあるんじゃないですか？」
良平が、言った。

「・そんな、ありませんよ。心当たりなんて」
言われた高橋は、動揺した。

（なんだよ、このガキは・・・）

「とりあえず、こちらへ」

長い廊下を歩いて、高橋は、応接室に柏木警部一行を案内した。

「少しお待ちください。」

そう言つて、高橋は姿を消した。

「それにしても、広い屋敷ですね。」

橘刑事が、思わず漏らす。

招かれたこの応接室もかなりの広さがある。

「玄関からだど、普通の家に見えたのにな。」

柏木警部が続いた。

「奥行きがすごいあるんですね、きっと」

良平もこの家の構造に興味を持っていた。

玄関をはいると、すぐに2階に続く階段があつた。

まっすぐ続いた廊下の左右には、いくつか部屋があつた。

この応接室は、だいぶ奥にあるようだが、それでもまだ少し奥に続いていた。

「お待たせしました。」

数分して、高橋が戻ってきた。

手には、黒色のケースが握られていた。

中を開けると、そこには、輝きを放つ宝石があつた。

その名の通り、涙が零れ落ちた時の形がくつきりと形どられている。

「きれいですね。」

良平は、素直に感想を述べた。

「当たり前です。どれだけ手に入れるのに、苦労したか・・・」

「普段は、どこに保管してあるんですか？」

「2階に管理してますが・・・」

「見せてもらっていいですか？」

「見せないといけないですか？できれば見せたくないのですが・・・」

「何か見られてまずいものでも？」

（こいつさつきから、なんなんだ。）

・・・まあいいか、念のためそれ以外は、しまっておいたからな）

「こっちです。」

高橋に続いて、2階への階段を上った。

すると前方に、普通の家では見ない扉が視界に入ってきた。

行く手を完全に阻んでいる。

「用心のためです。この鍵がないと開きません。」

高橋は、カードキーを取り出し、扉に取り付けられた装置に通す。

「このカードキーは、普段どこに？」

柏木警部が聞く。

「基本的に私が肌身離さず身につけてますよ。」

扉が開き、中に入ると、一階と同じように、中央に廊下が伸びていた。

一階と異なっていたのは、真っ暗ということだった。

外からの光がなかった。

「2階は、各部屋に窓はありません。」

高橋は、少し自慢げに語りかけた。

「すごい用心されてるんですね。他にも高価な宝石があるんですか？」

良平があたりを見渡しながら聞いた。

「そうですね。私の趣味ですから。」

「そうですか。」

「ここです。」

一番奥の部屋についた。上ってきた階段が少し見えた。それまでに、左右に5、6個の部屋があつた。

部屋の中は、いくつか箱が置いてあり、壁には絵画が何点か飾られていた。

窓はない。入口も一つだけ。

部屋の中のさらに一番奥に進むと、壁に埋め込まれた金庫があつた。

「普段はここに、保管してます。」

「そうですか。」

「セイントテールだろうと、盗むなんて無理ですよ。」

「いえ、油断は禁物です。セイントテールを甘く見ると、痛い目にあいますよ。」

良平は、冷静に言った。

「そうならないために、あんたら警察がいるんだろ」

「もちろんです。セイントテール逮捕のため、全力で警備しますよ。」

柏木警部は、力を込めて言った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

清風警察署

下見を終えた柏木警部一行は、警備方法について話し合っていた。

「北見刑事には、あの部屋の金庫の前で、箱の中に隠れていてもらいましょう」

良平は、最初にきりだした。

「箱の中にですか？」

「そうです、何があってもそこから出ないでください。」

天使の涙を盗むために、セイントテールは、必ず金庫の前に姿を見せるはずです。」

「そうか、万が一、俺達を取り逃がしたとしても、大丈夫ってわけか」

柏木警部がうなずいた。

「北見刑事が警備についていることは、セイントテールは知りません。」

だから、僕達の警備を突破した後なら、油断してるかもしれないですしね。」

「そうになると、セイントテールに北見の存在をわからせないようにする必要があるね」

増田刑事が言った。

「そうですね・・・前日からあの家にいて、極力外に姿を見せないようにするっていのはどうですか？」

「そうだな。」

柏木警部が言った。

「私達の警備はどうしますか？一階、二階にそれぞれ二人ずつとか」
橘刑事が、ホワイトボードに張り出されている、高橋邸の見取り図を見ながら言った。

「二階の扉のカードキーを持っている高橋さんの警護もいるな」
柏木警部が続く。

「直接二階から侵入されることがないなら、二階を最初から警備しておく必要はそれほどないと思います。」

ただ、カードキーがなくても、セイントテールなら扉を開けることができるかもしれないですよね。」

「今までも、いとも簡単に突破されてきたからな。そうすると、扉の回りを固めるか。」

柏木警部が、階段回りを指差した。

「2階への入口は、この扉だけ。突破されても、入口がこの扉だけなら、ここを押さえておけば、逃げられることもない。」

これなら、セイントテール逮捕間違いないじゃないですか!」
北見刑事が言った。

「これだけで、いいなら。とつくに逮捕できてるよ。そうだろ、良平」

柏木警部が、良平のほうを向いて言った。

「ええ。いつも、催涙ガスや気絶させられて結局、何もできないんですよね。」

そこをどうにかしないと・・・」

「やられたふりするとか?」

北見刑事がぼつりと言った。

「ばか、それぐらいセイントテールにばれるだろ。」

「やられたふり・・・それいいかもしれませんね。」

良平は、思いついたことを話した。

「たしかに、おもしろいが。うまくいかない場合も考えられるよな」

「そうですね。あくまで、作戦のひとつでいいこと。」

「まだ考えるのか?」

「今までのこと考えると、どれだけ考えても無駄ってことはないと思うんです。」

一つの作戦がだめでも、二重、三重と張り巡らせることで、有効になるかもしれないですし。」

「今回は、いつにもましてやる気だな。」

「はい。警備する場所も、いいですし。新戦力もいます。セイントテールを逮捕する絶好の機会だと思っんです。」

「そうだな。俺もいつも以上に気合をいれていかないとな」
柏木警部は、腕を回し、気合いを入れる。

「次は、セイントテールの動きを封じる方法ですね。」
良平が言った。

「前回のとりもちは、逆に自分たちの動きを封じちゃいましたもんね。」

増田刑事が言った。

作戦会議は、いつにもまして長時間続いた。

- - -
- - -
- - -

次の日の朝。

「おはよ、良平。」

あおいは、いつものように良平に声をかけた。

「ああ・・・おはよ」

良平は、少し遅れて返す。

「なんかすごい眠たそうだね。」

「またセイントテールが現れるんだよ。その警備について考えてたの」

「それはそれは。毎回がんばるね。逃げられてばかりなのに。」

「今回こそ、逮捕するからな。覚悟しておけて感じだよ。」

「今回の作戦は決まったの？」

「まだ、全部は決まっていらないんだ。いつも早めに決めすぎてたから、ぎりぎりまで考えようってことになったんだ。」

「ふーん。そーなんだ。まあ、がんばってね。」

あおいは、良平がいつも以上に、気合いが入っていると感じた。

- - -
- - -
- - -
- - -

予告日前日 高橋邸

柏木警部一行は、事前の打ち合わせのため、再度高橋邸に訪れていた。

「・・・ということですので、協力願いませんか？」

「わかりました。セイントテール逮捕のためです。協力させてもらいます。」

柏木警部は、事情を説明し、警備する2階の部屋のレイアウトの変更をお願いしていた。

「ご協力ありがとうございます。」

「準備は万端つてところか・・・」

柏木警部は、良平に言った。

「そうですね。強いて言うなら、警備員の数が少ない・・・というか、僕達以外いないってところですね。」

「いろんな事件が立て込んでてな。こっちまで、回ってこないんだ。」

「そうですか。人がいれば、いるほど、有利になるんですけどね。」
「そうだな。」

「なんの騒ぎだよ。親父」

突然、男の声がした。そこには、大学生らしき男性が一人立っている。

た。

「秀人。お前何しに帰ってきたんだ。」

「誰ですか？」

柏木警部が聞いた。

「息子の秀人です。」

「何しにはないだろ。」

秀人は、親父に近づき耳打ちした。

（金がなくなっただんだよ。またなんとかしてくれよ。あれのおかげで儲かってんだろ）

（それどころじゃないんだ。あれを、セイントテールが盗むと予告状が来たんだ。）

（周りにいるのは、警察の方たちだ。）

（なんだよそれ、大丈夫なのかよ。）

（そういうなら、お前も何か手伝え。盗まれたら、すべてが水の泡だぞ。）

（わかったよ。）

「刑事さん。俺も警備の手伝いさせてくれよ。」

二人の話を終えた秀人が、突然言った。

「しかし・・・」

柏木警部は、少ししびる表情を見せた。

「何人ぐらい、集められますか？」

良平が聞いた。

「5、6人は、集められるかと。」

「丁度いいじゃないですか。お願いしましょうよ。柏木警部。外回りの警備もしておくにこしたことはないですし。」

「わかった。明日、夜21：00が予告時間。一時間前までに集合ってことで。」

「わかったよ。」

「口が悪いガキだな。」

- - -
- - -
- - -
予告日当日

2階、奥の部屋

「じゃあ、よろしく願いしますね。北見刑事」

良平は、箱の中に入った北見刑事に向かって言った。

「ばつちりです。スタンガンに、これもね」

北見刑事は、両手で持っているものを示した。

「頼みます。」

良平は、箱を閉じた。

「こっちのほうもほぼ完成ですね」

長く一直線に伸びている廊下に、良平はある罫を仕掛けていた。

「これが活躍する前に、捕まえればいいんですけどね。」

1階 居間

高橋は、警備を警察に任せていたが、落ち着かなかった。

「もうすぐ時間か」

腕時計が予告時間の5分前を指していた。

高橋邸 外側

秀人達は、玄関周りに2人、庭に3人を振り分け警備していた。

5人分のトランシーバが警察から手渡されていた。

「本当に現れるのか？セイントテール」

「知らねーよ。」

秀人は内心いらいらしていた。

（セイントテールが余計なことしなけりゃ、こんなこと）

「しっかり警備しないと、中にいる警察の人に怒られるんじゃないの？」

突然声が辺りに響いた。

「セイントテールか？」

周りを見渡しても姿はない。

「屋上だ！！」

庭にいた友人から声が上がり、秀人は屋上を見た。

月明かりに照らされて、人のシルエットが浮かび上がっている。

（セイントテールが現れました。屋上にいます。）

セイントテールが現れたら、報告せよとのいいつけは守った。

「降りてこいなら、こっちからいつてやる。」

秀人とは、回りの塀によじ登り、そこから屋上の縁にしがみついた。もう1人が、秀人に続き、反対側からは残りの3人が続いた。

「あなた達の相手をしてる時間はないの。だからしばらくここで眠っていてね。」

「何を！！」

言っている意味がわからず、秀人がセイントテールに近づこうとした。が、力が抜けてくる。

周りも同じだ。

「いい匂いでしょ。リラックス効果もあるからゆっくり休んでね。」

セイントテールはそう言い残すと、ぴょんと屋上から飛び降り、秀人の視線から消えた。

屋上から降りたセイントテールは、一階の窓から、中の様子を見て回った。

「階段に、増田刑事と橘刑事……。他の二人は姿は見えないけど・・・」

階段付近。

「そろそろか」

橘刑事が、より集中を高めて、警戒を強める。

バツ！！

突然玄関の扉が開いた。

橘刑事と増田刑事の視線が一斉にそっちに移る。
扉は開いたが、その後特別変化はない。

ピカーー

少しして、辺りが一瞬に光に包まれた。

「うぁー！！」

「うぁー！！」

二人は視界が遮られた。

光はすぐに収まり、視界が戻ってきた二人には特別変った所はないように見えた。

「ちよつと、様子を・・・」

増田刑事が慎重に玄関に近づく。

「気をつけるよ」

「特に変わった様子は・・・」

玄関の扉を閉め、元の位置に戻ろうとする。

この瞬間、セイントテールは、階段の上の天井にくっついていた。

「なにかあったんですか？」

2階の扉の内側から良平と柏木警部が姿を見せた。

「玄関で突然強い光が・・・」

「セイントテールの仕業か。」

柏木警部が辺りを見渡す。

「こんばんわ。皆さんお揃いで。」

セイントテールが、2階の扉の前に降り立った。

「さっき使ったのは、これ」

セイントテールは、右手に球体を取り出した。

その瞬間、また光が辺りを包んだ。

「わっ!!」

良平達は目がくらんだ。

「しばらくじっとしててね。」

良平は、すぐ近くを通り過ぎたセイントテールの声を聞いた。

「何?どういうことだ!!」

同時に身体が強い力で引きつけられた。

「おっ・・・」

徐々に、周りが見えてきた。

「どこだ、セイントテール!!」

良平が前に動き出そうとしたが、前に進まない。

「動けない!?!」

「良平、どうなってる。俺も動けないぞ」

柏木警部の声がすぐ近くで聞こえた。

「これは・・・」

良平達は、いつの間にか縄で縛られ身動きが取れなくなっていた。
セイントテールの姿は見えない。

「これだと、作戦がだいなしじゃないか」

「とにかく、どうにかしてこの縄を解かないと」

4人は、それぞれ力を入れて縄を解こうとするがうまくいかない。

「北見刑事、そっちにセイントテールが向かいました。」
「了解。」

- - -
- - -
- - -

2F 奥の間前

「ここか」

セイントテールは扉をそっと開き、中に入った。
辺りを見渡す。明かりはついておらず、薄暗い。

（あれだけ張りきつてた割には、今のところ、いつも同じだけど）

金庫の前に来た。

その丁度、目の前の箱にいる北見刑事の視界に、セイントテールの
後姿を捉えた。

（来た。）

北見刑事が出るタイミングを伺う。天使の涙を手にする瞬間を狙っ
ていた。

スタンガンを握った右腕に力が入る。

セイントテールが手を振りかざす。

金庫の鍵が解かれた。金庫の中の天使の涙が姿を現した。
「これが、天使の涙ね。」

セイントテールが、天使の涙に手を伸ばす。

（今だ！！）

「くられえ！！セイントテール」

北見刑事が箱から勢いよく飛び出した。

「えっ」

セイントテールは、突然飛び出してきた北見刑事に虚を衝かれた。北見刑事のスタンガンの直撃はなんとか反応し、直撃を避けた。

しかし、体勢を崩した。

「このっ」

再度セイントテールに向けて、スタンガンを振りかざす。

セイントテールは、振りかざした手首を掴んで食い止める。

「あなた、刑事？」

「そうだ。おとなしく逮捕されるんだ！！」

北見刑事が、力をこめる。スタンガンがセイントテールに少し近づく。

「そう簡単に捕まるわけにはいかないの。」

セイントテールは、片足を北見刑事の腹の内側にたたみ、そして一気に蹴り上げた。

北見刑事の身体が浮き上がった。さらに、スタンガンを持った右手に蹴りを放つ。

「がっ」

スタンガンが北見刑事の右手から離れ、地面に落ちた。

セイントテールは、素早くそれを拾い上げると、北見刑事と距離をとった。

「逃がさないぞ。」

北見刑事は、入り口の扉に回り込んだ。

一瞬の静寂。

「ワン、ツー、スリー！！」

セイントテールがそう呟いた。

すると、突然入り口の扉が開いた。

「何だ!？」

北見刑事は、驚いて後ろを振り返った。

「よそ見は、禁物。」

「えっ。」

北見刑事が、慌てて振り返ると、身体に衝撃が走った。

セイントテールが、スタンガンで北見刑事に放っていた。

「残念でした。」

セイントテールは、そのまま廊下を走り抜ける。

一方、良平達はまだ身動きが取れないでいた。

イヤホンから、北見刑事の声は聞き取れていた。

「ちょうど、セイントテールが廊下にいるタイミングだな。」

柏木警部が言った。

「あそこまで何とか」

良平達は、ある地点に向かっていった。

廊下に仕掛けた罠を発動させるためのスイッチがある場所だ。

「あと少しです。がんばりましょう。」

あと少しでそこまで到達しようとしていた。しかし、

「ここに何かあるのかしら？」

「セイントテール!!」

「あんなところに、刑事さんがいるのは、さすがに驚いたけど、

こっちは、どんな罠なのかしら？」

「そこ動くなよ。」

「動かないと思う？」

セイントテールは、一階に飛び降りた。

「天使の涙、確かにいただきました。」

そのまま、姿を消した。

「くそ。」

廊下に仕掛けた罫は不発に終わった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「それで廊下には、何が仕掛けてあったの？」

あおいが、良平に聞いた。

「そんなの聞いて、何になるんだよ。」

良平が不機嫌そうに言った。

「・・・今後の参考に」

あおいは小声で言った。

「えっ？なんか言った？」

「何でもない。で何だったの？」

「言わない。」

「何で？教えてよ。」

「なんか言いたくない。」

良平は、意地になってその中身を話そうとはしなかった。

第7話

教室

良平は、友人である猿渡太郎と話していた。

「セイントテール同好会を作らないか？」

「セイントテール同好会？」

良平は、突然何を言い出すのか訳がわからなかった。

「セイントテールってさ、やっぱ人気あるじゃん。」

「だから」

「お前、セイントテールの現場にいつもいるんだろ。」

誰よりもセイントテールについて知ってるわけだ。」

「・・・だから、それがどうしたんだよ。」

「ずっと逃げられっぱなしなわけだし、同好会作って、

同士を募るのもいいんじゃないかってこと。」

「お前が、セイントテールの写真を取りたいからだろ。」

「・・・ばれた？」

「お前の魂胆なんてばれられ。」

「まあ、いいだろ。目的はおんなじって事で。」

猿渡は新聞部に所属していて、カメラ好きで知られていた。

「具体的に、何するのさ？」

「まずは、メンバー募集だろ。あつ、その前に申請しないとな。」

「それはいいけどさ。もしかして、

すぐにセイントテールの警備できるって思ってるんじゃないか？」

「えっ？違うの？」

「できるわけないだろ。」

「お前はできてるじゃないか。」

「・・・それはそれだよ。」

「お前だけ、特別扱いはおかしいだろ。お前より俺の方が役に立つ

と思うけどな。」

猿渡は、カメラを構える。

「まあ、作ってみるのもいいんじゃないか。」

良平も、セイントテール同好会を作るとは、悪くないと思っていた。

「それじゃあ、さっそく申請してみるよ。」

「ああ、頼む。」

「なに二人で話してるの？」

あおいが、二人に話しに入ってきた。

「あおいには、関係ない。」

「何それ。猿渡君、何の話？」

あおいは、猿渡に聞いた。

「セイントテール同好会を作ろうって。」

「セイントテール同好会？」

「そう、俺がこのカメラでセイントテールの正体を暴いてやるのさ。」

「

「そうなんだ。」

あおいは、良平の方を見た。

「なんだよ、その顔。」

「良平だけだど、頼りないもんね。」

あおいは、皮肉たつぷりに言った。

「そうなんだよ。こいつだけに任せておけないんだよ。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

数日後。

セイントテール同好会の申請は許可が下りていた。

掲示板に、メンバ募集の告知もしていた。

活動拠点は、空いているクラブの部室を借りた。

「メンバ、全然集まらないな。」

猿渡は、気が抜けた感じで言った。

告知してから一週間。まったく、メンバは集まっていなかった。

「まあ、セイントテール同好会として、どう活動するか全然決まっていなかった。」

「だからさ、俺達でセイントテールを捕まえようってことだろ。」

「そうなんだけどさ。そうは言っても、何の根拠もないわけだろ。」

ただ言ってるだけで。」

「確かに。」

「何か、きっかけがあればいいんだけど・・・」

とりあえず立ち上げたものの、特に何をするわけでもなかった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

さらに数日後。 教室

「おい、良平！！やったぞ。」

猿渡が教室に飛び込んできた。

「何だよ、大声出して。俺は、昨日セイントテールの警備で眠いんだ。」

良平は、昨日もセイントテールの警備についていた。

結果は、・・・いつものごとく逃げられてわけだが。

「そういうなよ。これを見ろよ。」

猿渡は、机に一枚の写真を置いた。

「ん・・・これは、・・・これ！！」

良平の眠気は一気にふっとんだ。

写真には、月明かりに照らし出されたセイントテールの後姿がはっ

きりと映し出されていた。

「お前、これどうしたんだよ。」

「昨日撮った。」

「昨日撮ったって、お前あそこにいたのか？」

「ああ、お前の後つけてな。」

「お前な」

「警備の邪魔はしてないだろ。逃げ道を予測して、撮ったのがこれさ。」

「あいにく、後姿しかとれてないけどな。」

後姿とはいえ、セイントテールの姿を残した写真としては、初めてといえるものだった。

「何見てるの？」

「あおいが二人の会話に入ってきた。」

「あおいは、二人が見ている写真に目を移した。」

「！！これ・・・」

「そう、セイントテールさ。よく写ってるだろ。」

「猿渡が、気分よさそうに言った。」

「そうだね・・・（いつの間に・・・）」

「で、これどうするんだよ？」

「良平が聞いた。」

「そうだな。特に考えてなかったけど、これで同好会のメンバーめ・・・」

「そうだ、いいこと思いついた。ちょっと耳貸せよ。」

「猿渡は、良平に耳打ちした。」

「はあ、お前本気で考えてるのか？」

「ああ、本気。大マジ。」

「えっ、なにになに。」

「あおいも、聞き逃すわけにはいかないと、話を聞こうとする。」

「これ使ってさ、セイントテールをおびき寄せるのさ。」

「おびき寄せる？」

「そう、これを新聞に載せて、セイントテールへメッセージを送るのさ。」

「メッセージ？」

「『セイントテールの正体を収めた写真は、俺達が持っている。』

取り返したいなら取り返してみろ』って」

「何それ。そんな写真持つてるの？」

「持つてない。」

「そんなことしても、セイントテール相手にしないんじゃない？」

猿渡とおおいのやり取りを聞いていた良平が言った。

「もし現れなかったら、セイントテールは俺達に尻尾を巻いて逃げ出したってことになる。だろ？」

「そういうこと。どっちにしろ、問題はなし。」

良平と猿渡は、もう全てがうまくいったかのように興奮していた。

（言いたい放題言っちゃって。）

あおいは、おもしろくない。

「新聞に載せてって、どうやって載せるつもり？ 考えてないでしょ。」

「

「……」

「……」

二人そろって、黙る。

「そうだ、警部さんに頼んでみるのは？」

猿渡が良平に聞いた。

「そんなことできるわけないだろ。お金もかかることだし。」

「お金がかからない方法で、メッセージを送る方法か……ネットとかは？」

地元の新聞紙に、セイントテール同好会からのメッセージが告知された。

「思ってたより小さいんだな。なんかこう、一面にドバーツと載るのかと・・・」

猿渡が、新聞を見てつぶやいた。

「これで、セイントテールは気づくかどうか・・・」
良平も少し不安になる。

「もし、少しして、反応なかったら、『どうしたセイントテール、恐れをなしたか!』ってだそうか?」

猿渡が冗談交じりに言った。

「それもいいけど、別の方法で伝えることも考えないといけないかもな。」

(そんなに、お望みなら叶えてあげるわよ。)

その様子を見ていたあおいは、指をばちんと鳴らす。

「うん!? 何だ?」

良平が異変に気づく。

新聞紙の告知部分が徐々に膨れ上がっていく。

「なんだよ、これ。」

猿渡も驚きを隠せない。

パン

膨れ上がったものが、突然破裂した。

その中から、一枚のカードがひらひらと落ちてきた。

「これは・・・」

良平が手に取る。

『今週土曜日19:00、お望みどおり、あなたが所有する写真をいただきますに参ります。 怪盗セイントテール』

セイントテールからの予告状だった。

「直に届いた・・・」

「セイントテールからの予告状・・・」

猿渡は、本当に届いたことに気持ちがついていけなかった。

「急がないと、今週土曜日だぞ。」

良平が、猿渡に言った。

「・・・ああ、・・・ああ、そうだな。急がないとな。」

良平に言われて、猿渡も元気を取り戻した。

「そういえば、お前の写真ってどれを盗む気なんだ？」

「さあ、手当たり次第盗んでいくんじゃないの？」

「そうか。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

放課後 セイントテール同好会室

「まずは、この試作品なんだけど・・・」

西脇が取り出したのは、小さなバズーカ砲だった。

「また、物騒なものがでてきたな。」

良平が言った。

「で、どうやって使うんだ？」

猿渡は、手にとって使う気満々だ。

「コンビニとかに、防犯用としてペイントボール置いてあるだろ。」

西脇はしゃべりながら、片手にペイントボールを握った。

「あー、犯人にあてるやつだろ。」

猿渡は、バズーカ砲を触ったまま言った。

「そうそう、あれ。・・・でもさ、あれって実際当たんなくてさ。」

それを解消するために、作られたのがこれってわけ。」

「確かに、当たりやすくなってるかもしれないけどさ。」

そんなに驚くようなものでも・・・」

良平は思ったことをそのまま言った。

「もちろん、それだけじゃないさ。うちの売りはこれ。」

西脇が指差したのは、上に取り付けられてスコープだった。

「自動的に対象物を感知して、自動で発射する機能が搭載されるんだよー!!」

「まじで!! ちょっと試しに動かしてみろよ。」

猿渡は、バズーカ砲の前に立った。

すると、少ししてバズーカ砲が猿渡の方を向いた。

しかし発射はすぐされない。

「?」

猿渡は、失敗かと思いバズーカ砲に近づいた。

バツー!!

近づこうとしたところで、バズーカ砲から空砲が発射された。

「わっ!! なんだよ。」

「えらくタイムラグがあるな」

良平が言った。

「まだ試作品だからさ。そこはまだまだ改良の余地ありってところ。」

「うーん、これじゃセイントテールのスピードについていけないじゃないかな。」

この後も、試作品が次々登場したが、これといったものはなかった。

- - -
- - -
- - -
翌日。

「で、進んでるの？作戦会議は？」

あおいが、良平に聞いた。

「まあ、ぼちぼち。」

「今回はばつちりとか言わないんだ。」

「毎回やられてるからさ。今度こそ必ずとか言って。」

「へえー。ちょっとは反省してるんだ。」

「そういうこと。」

「メンバの方は集まってるの？」

「当日身に来る奴は多いみたいだけど、メンバに入りたいて奴は今のところいないかな。」

「また、やられそうな感じがするけど・・・」

「一泡はふかせてやるさ。」

「一泡でいいんだ。」

「そつ、まずそこから。一步一步ね。」

（いつもと違って、冷静じゃん。）

あおいは、少し感心した。

（そーは言っただけ。結局何にも決まってるないんだよな。）

良平は、頭の中で呟いた。

- - -
- - -
- - -

セイントテール同好会部室

「で、結局どうする?」

良平は、猿渡と西脇に聞いた。

「どうするって?」

猿渡が返した。

「作戦だよ!! 作戦。まだ何にも決まってるないだろ。」

「作戦って言われてもさ。今まで散々考えても、やられてきたんだろ。」

あれこれ考えてもダメなんだって。」

カメラの手入れをしながら、軽く言う。

「これだけ、用意しておけば何とかなるでしょ。」

西脇の周りには、試作品がたくさん置かれていた。

「そう言ったけどさ。俺だって、別に何も考えてないわけじゃないぞ。」

猿渡が切り出した。

・・・

「たしかに、手としてはありだと思うけど・・・、そううまくいかな」

猿渡の考えを聞いた良平が言った。

「まあ、結局はどう動きを止めるかになるだろうけど」

「そういうことなら、僕にも少し考えが・・・」

西脇が話し始めた。

・・・

「おー、それいいじゃん。それでいこうぜ、なあ良平。」

「そうだな。結構いけるかもな!!」

- - -
- - -
- - -

予告日当日

「そろそろ時間だな。」

良平が壁の時計を見た。

「このカメラにおさめてやる。」

猿渡はカメラを手に、力を入れる。

しかし、そこに西脇の姿はなかった。

同好会部室周りは、予想に反して、かなりの人だかりになっていた。

セイントテール見たさに、集まったようだ。

良平と猿渡は、部屋の中に待機していた。

「メンバが集まらないって言ってたけど、人だけは集まってるのね」

セイントテールは、部室が見下ろせる体育館の屋上にいた。

「そろそろ時間ね。」

セイントテールは、軽く伸びをしてから、飛び上がった。

「現れないな、セイントテール」

「どこ？」

部室の周りの人たちが騒ぎ始めた。

「こんばんわ。」

辺りに声が響いた。

「今日は私のために集まってくれて、ありがとう。」

でも、しばらくそこで眠っていてね。」

「何だ？」

「どういうこと？」

シューーー

白い煙があたりに充満し始めた。
強烈な眠気が、周囲に人間を襲った。

「なんか急に静かになったな」

猿渡は、部室を扉を開けて外の様子をのぞいた。

「うわ！ー！なんやこの煙。」

「ばか。閉めるよ。いつもセイントテールが使っ手口だ。

そろそろ来るぞ」

「わかってるじゃない。」

セイントテールの声がしたのは、二人がいる扉とは逆の窓側からだ
った。

二人が振り返ると、セイントテールの姿があった。

「よし、逃げるぞ。猿渡」

「了解！！」

ふたりは部室を出て、走り出した。

「ちよつと、いきなり逃げるって」

セイントテールも後を追う。

部室を出ると、二人が体育館へ続く廊下にかかろうとしていた。

「逃げ切れると思ってるの？」

セイントテールは二人の姿を追う。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

体育館

「はあ、はあ」

良平達は、なんとかセイントテールに追いつかずに体育館の中に入った。

いつもなら部活をしている人がいるはずなのだが、体育館の中は、誰もいなかった。

「今のところ、予定通りってとこだな」

猿渡が、息を切らしながら言った。

「そうだな。後は・・」

「いつまで追いかけてこするつもり？」

二人が振り返ると、セイントテールの姿があった。

「くそ、もう追いついてきやがった。」

「猿渡、後は俺が引き付ける。」

「わかつた。」

良平と猿渡は、一手に分かれた。

「お前が、狙ってるのはこれだ。」

良平は、セイントテールに見せ付けるように、カメラのフィルムを上にかかげた。

セイントテールは、良平との距離はとりつつ、良平と向き合った。

その間に猿渡は、倉庫の中に入った。

良平は、倉庫とは反対側の、2階へと続く階段に向かった。

しかし、セイントテールは良平には見向きもなかった。

「来ないのか？」

良平の問いに、セイントテールは笑みを浮かべた。

「本当にそれがターゲットならね。」

「なつ」

そして、セイントテールは猿渡が入った倉庫に向かって走り出した。

「あつ、くそ。待てよ。」

「あつ、くそ。待てよ。」

言葉とは裏腹に、良平は腰の辺りで握りこぶしを作った。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

倉庫

中に入ったセイントテールは、入り口の扉を閉めて内側から鍵をかけた。

外から、良平が入ってこれないようにするためだった。

倉庫は入り口はひとつしかなく、窓も内側からは出られないようになっていた。

それなりに広い部屋だが、いろいろな物が格納されていた。

「もう来たのかよ。」

「鬼ごっこはここまでね。」

セイントテールは、ゆっくりと猿渡との距離をつめる。

「これで、お前の正体を暴いてやるさ!!」

猿渡は、ぶら下げていたカメラを構えた。

「こっちもいるぞ!!」

それに合わせたかのように、倉庫の中に隠れていた西脇が飛び出した。

ちょうどセイントテールの背後、猿渡と挟み込むような位置だ。

手には、試作品のバズーカを手になっている。

「作戦通りってわけ？」

セイントテールは、両方の動きに気を配りつつ聞いた。

「そうや。これで終わりやな、セイントテール」

「まだ、捕まえた気になるのは早いんじゃない？」

セイントテールは、右手に卓球球ぐらいの大きさの球体を取り出し、地面に投げつけた。

それと同時に、白煙が発生し、倉庫内に広がった。

「そういう手を使ってくることは、お見通しさ。良平!!」

「わかってる。」

猿渡の声に反応したのは、良平だった。

声は、倉庫の外、窓の向こう側から発せられた。

少しして、倉庫の窓が次々と開かれていった。

それと同時に、倉庫に充満していた煙は外へと逃げていった。

「どうだ、セイントテール。これでお前の・・・」

猿渡は、言いかけて絶句した。

視線の先からセイントテールの姿が消えたことに気づいたのだ。

「なっ、いない。」

あたりを見渡すが、どこにも姿がない。

「どこに？」

西脇も姿を見失った。

「どうしたんだ？」

すぐに状況がつかめていない良平が聞いた。

「セイントテールの姿が消えたんだよ。」

「なっ、そんなはずはないさ。どこかに隠れているはずだ。」

すぐに、俺もそっちに行く。」

良平は、急いで倉庫の入り口に向かった。

「隠れたって無駄だぞ。お前のターゲットはここにある・・・」

猿渡は、再度絶句した。

さっきまで確かにあった場所に、フィルムがなくなっていた。

「あー、ない！！いつの間に。」

煙が充満していたわずかな時間に、盗まれていた。

猿渡の前に一枚のカードが降ってきた。

「なんだ？」

拾い上げてみると、

『フィルムは確かにいただきました。よそ見厳禁。 怪盗セイント

テール』

猿渡をあざ笑うかのような内容が書かれていた。

「どうした？」

ちようど、良平が倉庫内に入った来た。

「くそ。これ見るよ。」

「やられたな。」

「どうする？まだ近くにいるかもしれないぞ」

猿渡が倉庫から出ようとする。

「そうですね。僕も行きます。」

西脇が後に続いた。

「そうだな。」

良平も後に続いた。

良平は、倉庫を出て、少し考えた。

（待てよ……。それにしても、セイントテールはどうやってあそこから出たんだ。

入り口は1つしかないし、そこはずっと開いた形跡はなかった。
だとすると、部屋の中にまだ残っていた？

・・・やられた。）

「猿渡、西脇。戻るぞ。セイントテールは、まだ倉庫の中だ。」

「何？どういうことだよ。」

猿渡が聞いた。

「いいから、とにかく戻るぞ。」

良平は、急いで倉庫に向き直り、走り出した。

（セイントテールはあそこから出てきていない。
まだ、間に合う。）

「逃がさないぞ。セイントテール!!」

良平たちは、倉庫たちになだれ込んだ。

しかし、変わらず静まり返った倉庫のままだ。

「いないじゃん。やっぱりもう逃げたんじゃないか？」

猿渡が言った。

「これ、見てください。」

西脇は、窓の冊子の辺りを指差していた。

そこには、切り落とされた鉄格子があった。

通常、鉄格子がかかっているため、窓からの出入りは出来ないが、ちょうど人一人が、通り抜けできるようになっていた。

「やっぱり、俺たちがここを出たときは、まだここにいたんだ。」

「くそ、また入れ違いってことかよ。」

「じゃあ、今度こそ追いかけましようよ。」

猿渡と西脇が、倉庫から出て行った。

「もうちょつと、気づくのが早ければ……」

良平も少しして倉庫から出て行った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

誰もいなくなった倉庫

1つの影が、地面に降り立った。

「急に戻ってくるんだもん。びっくりしちゃった。」

セイントテールだった。

良平が倉庫に戻ってきたとき、セイントテールはまだ倉庫の中にいたのだ。

予定通り、窓の鉄格子を切り終えた時、良平たちが戻ってきたため、やむなく天井近くに隠れていた。

「でも、詰めが甘いのは相変わらずずっとところね。」
セイントテールは、窓からではなく、入り口から悠々と外に出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3991e/>

怪盗物語

2010年10月9日16時05分発行